ソウルのマナティ

げんじあきら

目次

○現代版ゆりかご
ソウルの縄文鍋

○クリスマス

○日本の正月にヨウショウから電話

○先ノ岬の頭蓋骨

○１月のソウルのマナティ10台

○交通事故

○ソウルの縄文鍋工場完成

○先ノ岬一葉が刺された

○温泉宿

○ソウルの縄文電子鍋生産開始
ソウルのマナティ中国

○サカモトイワオ

○麻薬の密輸

○退院

○ゆりかご

○３日続けて南雲一郎と出会う

○ソウルのマナティ中国
ソウルのマナティ日本

○篠田由美子の決断

○今日で終わりだ

○篠田由美子と篠田三太郎

○決着

少しの解放感

〇ミスリーからのＳＯＳ

「先ノ岬は現代源田の顧問を辞めたのか」

「そうではないが、もう１つの顧問の仕事が忙しい」

「何をやっているのだ」

「話せない」

「もうソウルには来ないのか」

「必要があったら行く」

「明日来てくれないか」

「どうしたのだ」

「わたしソウル工場の社長になったけど動かせない」

「工場を動かせないのか」

10月下旬になっていた。先ノ岬一葉は、２つの顧問の仕事を引き受けている。報酬は、20万円だ。２つの顧問をやっても、40万円にしかならない。貧乏に暮らしている。食事も自分でつくっている。自炊している。国分寺のマンションに１人で住んでいる。

ミスリーがソウル工場の社長になって20日が過ぎている。現代源田株式会社の韓国現地法人の社長である。

ミスリーは、まだ25歳である。現在、日本の現代源田からソウル工場に派遣されている社員は、誰もいなくなった。５名の社員が派遣されていたが、全員日本に帰っている。現代源田のソウル工場は、ソウルの社員だけで運営されている。

ミスリーは、電子湯沸かし器のソウルの縄文と、１人乗り自動車のソウルのマナティの特別チームの責任者でもある。ミスリーに大きな負担がかかっている。

先ノ岬一葉は、もう１つの顧問の仕事も、メンドーなことになっていた。

こっちに集中したいのだが、ミスリーのことを思うと、そうもいかない。

先ノ岬一葉は松下三郎に電話をした。

「どうぞ、気をつけて」
松下三郎は、来年の株主総会で取締役に選任される予定である。先ノ岬一葉には、なにかと、援助をしてくれる。先ノ岬一葉の動きや、経費の使用などは、すべて、松下三郎経由で行っている。現代源田の人事部長だ。

金浦空港はまだ早朝だった。
「しばらく」
先ノ岬は、ミスリーの顔を一瞬見た。先ノ岬は、一瞬顔を見ることで、人の状況を理解できると考えている。常に、そのようにしている。ミスリーは、笑顔だったし、みずみずしい顔をしていた。昨日のミスリーの電話からは、想像できなかった。
「どこかで話しますか？」
「あなたの顔を見たらもういい」
「車で話す」
「早く工場を見て欲しい」
先ノ岬は、意外であった。ミスリーは、少しは、パニックになっていると思っていた。
「工場を動かせないっていうのはなんですか？」
「わたしの指示をみんなきいてくれてないような気がする」
「みんな集めて話しをしたのですか？」
「どういう話しですか？」
「ソウル工場は車の部品の工場が半分とエレクトロニクスの生活用品の工場にする」
「工場は建設しているのですか？」
「本社は資本金を増やしてくれただけで何もしてくれそうもない」
「プラントはソウルのプラントですか？」
「わたしずっと５時間くらいしか眠ってない」
多分、ミスリーは、航空母艦のようにやっているのだと思った。すべてが、ミスリーを経由しているのだろう。指示する人が、ミスリー１人なのだろう。決定者が１人なのだ。
「先ノ岬チームはどうなっているのですか？」

「ソウルの縄文の10月の売上は３００００個の売上でうまくいっていると思う」
「韓国のですか？」
「みんなは？」
「パクヨンギもパクスジンもキムキンホも元気にやってる」
「落ち着いているのですか？」
「平気だと思う」
「日本へは？」
「11月から毎月２００００個出荷する」
「毎月１日に堺に着くようにする」
「上海は？」
「石門一路のスーパーマーケットのバイヤーの要請で12月１日から毎月１０００個送る」
「上海は大きいけど今後どうなるかわからない」
「みんなはどうですか？」
「ヨウショウもワンスイもチャンスーも元気でやっている」
「ソウルの縄文はうまくいっているんだ」
「電子鍋の工場にするのがなかなか動かない」
「みんな自動車部品しかやったことがないから」
「澤田社長がいなくなったりして社内事情が不透明だ」
「わたしも話せない」
「不信感があるのか」
「わたし25で澤田社長の秘書だった」
「いきなり社長になってる」
「こんな人事はおかしいという人もたくさんいる」
「話せないことがたくさんある」
「それはわかっている」
「どうすればいいかわからない」

先ノ岬一葉は、工場を見て回った。ソウル工場の人達は、先ノ岬のことを、あまりよく知らない。ソウルの縄文をやっている人だと思っている。ミス

リーをソウル工場の社長にした人だとは思っていない。
工場の一部で、いままでの自動車部品の工場を解体している。解体しながら、電子鍋の生産プラントを建設している。
先ノ岬は、工場を１人で見て回った。
先ノ岬は、途中で引き返して、ミスリーの部屋に行った。社長室がある。
「ソウル工場の10月の売上はどうなっているのですか？」
「工場が半分くらいしか動いていないので売上少ないのではないかと思うけど」
「もともと赤字でやっていたから関係ない」
「半分稼働を止めても状況は変わらない」
「調べたのか」
「自分で把握したかったから」
「先ノ岬特別チームから10％ソウル工場がもらうことになっているが」
「10月は２０００万ウオンくらいになる」
「純粋に収入だから助かる」
「これがなかったらやっていけないかもしれない」
「建設中のソウルの縄文の電子鍋のプラントは特別チームの費用でやっている」
「ソウルの縄文はいまのところ安定した収入が得られそうなので特別チームの建物にする」
ミスリーは、まだ25歳である。ソウル工場の実態をよく掴んでいる。25歳の女性で、これほどの人はいないと、先ノ岬は思った。
「ミスリーは何が不安なのだ」
「みんなが指示をきいてくれないと言っていたのはなんですか？」
「50名をソウルの縄文の工場勤務にしてある」
「勉強会をするように言ってあるがやらない」
「何をしているのだ」
「みんな自動車部品の工場から移されたくない」
「工場の建設は進んでいる」
「人が進んでいない」
「みんなどこにいるのだ」

「会議室にいる」
「50人いるのか」
「そうだ」

〇先ノ岬一葉の話し
「こんにちわ〜先ノ岬一葉です」
「ソウルの縄文の事実上の責任者です」
「ソウルの縄文は私の考えで進めました」
「これからどうしたいのか話します」
「ミスリーの話しとダブるかもしれませんけど」
先ノ岬一葉は、いきなり、会議室で話しはじめた。
キムキンホが韓国語と日本語の通訳ができるとは思わなかった。ずっと、ミスリーが先ノ岬の通訳をやってきた。もう、ミスリーはソウル工場の社長である。
いきなり話しはじめた先ノ岬に、50人の社員は驚いたようだが、集まって話を聞く様子もない。
「私の望みは、ソウル工場の人達が、クリエイティブに仕事をして、生活することです」
「確かに、ソウル工場は、日本の現代源田の子会社だけれど、２６０人のソウル工場の社員が、クリエイティブに仕事をしないと、結果的に、日本の現代源田にプラスをもたらすこともありません」
「現代源田のソウル工場は、自動車の電子部品を生産してきましたが、競争も激しく、自動車会社が内製化を進めていることもあって、生産量が少なくなってきています」
「ソウルの縄文は、大阪の堺工場の商品センターで開発された、電子機器です」
「電子湯沸かし器です」
「全量、ソウルのジュソン電子で生産しています」
「現在、韓国で３００００個販売しています」
「11月から日本で２００００個12月から上海で１０００個販売を開始する

予定です」
「ソウルの縄文は、まだ１つの商品ですが、すでにして、ソウル工場を運営することに、大きなプラスになっています」
「ソウル工場としては、従来の自動車の電子部品が半分、生活機器が半分のつもりで、体制を固めようとしています」
「具体的には、現在建築が進んでいる、電子鍋を生産することです」
「ここにおられる50名の方は、自動車の電子部品が、社会的に重要なもので、家庭用品には、気が乗らない方もいらっしゃるかもしれません」
「よく考えなければならないのは、自動車の電子機器は、あくまで、自動車の部品だということです」
「部品を生産している限り、製品を生産している会社の意向に、左右されてしまいます」
「自分で生産して、生活している方に使っていただいて、自分でそれを確かめることは、商品を作る人の喜びです」
「現在建設中の電子鍋の工場は、私は、作り手の１人として、お店に行っても、家庭でも、自分の目で見ることができるわけで、早く商品が生産できないかと、待ち望んでいます」
「私は、ソウル工場が、自動車会社の部品工場だったものが、自分で、生活者のためのものを生産する工場に脱皮する一歩だと考えています」
50人の会議室の社員は、先ノ岬の話しを、真剣そうに聞いていたわけではないが、無視したわけでもない。
50人の社員が、どう動くか、予測はできない。
「どうもありがとう」
「ソウルの縄文の工場長は決めてあるのですか？」
「いつから稼働ですか？」
工場長は、意外にも、60歳の男性だった。ミスリーだったら、もっと若い人を工場長にすると思った。ハンジョンという人だった。ミスリーが社長室に来るように電話をした。
「ハンジョン、先ノ岬さんと話をして」
ハンジョンは、50名をチーム分けしていた。生産ラインの担当と、部品の担当と、仕入れの担当と、品質管理の担当と、生産ラインの保守の担当と、出

荷の担当である。
先ノ岬が驚いたのは、先に、チーム分けがあったのではなくて、50人の特長や特徴を書いてあったことだ。
「これはいつ書いたのですか？」
「もう会議室で待機をはじめて７日なる」
「ずっとこれを書いていたのですか？」
「ハンジョンはパソコンが得意ですか？」
ハンジョンは、みんなにこれを発表して、それぞれの準備をしてほしいと思っている。
先ノ岬は、ミスリーの顔を見た。ミスリーに安どの表情がのぞいた。
工場の稼働は、来年の、２月の韓国のお正月明けにした。

〇少しの解放感を保て

１時間後、ハンジョンとミスリーで、50名のチーム分けの指示を行なった。各チームのリーダーも決めて、今後の、各チームがやるべきこととスケジュールを、みんなで検討することになった。
「お昼だけど」
先ノ岬は、今日は、朝早くソウルにやってきた。やっとお昼である。
ミスリーは、弁当をつくってきていた。ここのところ、お弁当をつくるらしい。みんな、ミスリーに話があるので、お昼も外に出られない日が続いているようだ。
「あなたの弁当もつくってきた」
ミスリーには秘書がいないようだった。先ノ岬へのお茶も、ミスリーが煎れている。コーヒーだが。ミスリーは、前のソウル工場の社長だった澤田二郎の秘書だった。何でも自分でやれるのだろう。
「あなたが来てくれて助かった」
「ソウルの縄文に軸足移すことが難しい」
ミスリーは、難しい日本語を話す。
ミスリーのつくる弁当は、おいしい。ごはんも冷めないように温かくしてある。

「ミスリーが１番大事にしないといけないことがあります」
「なんだ」
「ソウル工場の少しの解放感を最適な状態に保つことです」
「何を言っているのかわからない」
「リーダーというのは支配をしたくなる」
「人間のエクスタシーだから止めようがない」
「信じられない」
「人はひ弱だから集団になっている」
「集団にならないと鹿にさえ敵わない」
「地球でチャンピオンにならないと人間も捕食される」
「人間は集団になることと頭脳を進化させることで地球のチャンピオンになった」
「集団だから強いのだけれど困ったこともある」
「集団で社会をつくる」
「社会は人のこころの集まったものだ」
「社会にはリーダーが欠かせない」
「誰かが指示しないと社会は動かない」
ミスリーが、先ノ岬の話しを、理解しているのかどうか、よくわからなかった。しかし、先ノ岬は、今日、話しておかなくてはならなかった。ミスリーに最も大事な話しである。
「お店で温かいの食べた方が良かった？」
総務の担当者が入ってきた。ミスリーの社長室は、ドアは閉まってはいるが、誰でも、勝手に入ってくる。
「最近まで秘書だったわたしにみんな指示をしてほしいと言う」
「わたしがまごつく」
「人には権力のエクスタシーがある」
「権力のエクスタシーはチャンピオンのエクスタシーが導いたものだ」
「ミスリーが次第に権力のエクスタシーに襲われることがフツウです」
「わたしは気持よくなるのか」
「他者に指示することに人は快感を覚える」
「わたしは注意しないといけないのか」

「特にミスリーはリーダーの経験がなかったから注意が必要だ」
「どういう注意なんだ」
「まずこういう話を聞きたくなくなる」
「先ノ岬と話したくなくなるなど考えられない」
「私はよろいの話しをしている」
「よろいってなんだ」
「ソウル工場の社長らしくしたいとミスリーは考える」
「社長らしくというのをよろいと言っている」
「社長だから専用車と運転手がいる」
「澤田社長にはいたけどわたしは自分で運転したいから辞めてもらって車も返した」
「車も運転手さんもレンタルだった」
「これから注意しないといけないことだ」
「わたしが社長だって示したくなるのか」
「それがフツウの権力のエクスタシーだ」
「権力のエクスタシーと戦わないといけないのか」
「ミスリーの身体にあるエクスタシーと戦わないといけない」
先ノ岬は、このような難しい話を、ミスリーが聞くことそのものが大事だと思った。フツウは、先ノ岬の、こういう話を、聞きたくなくなるのが、権力者だ。先ノ岬には、何度も経験がある。
「少しの解放感とはなんだ」
「集団のリーダーが考えないといけないことだ」
「人はホントは集団になりたくない」
「豹のように個で生きたいのが本音だ」
「人のヒーローはみんな孤独で個で生きている」
「人は個ではひ弱な現実もよくわかっている」
「だから人は集団になる」
「集団になるとリーダーが必要だし掟もできる」
「権力のエクスタシーがあるからリーダーは掟を強めるし支配をしたくなる」
「支配が強いと人は反乱する」

「掟も何もないと何をしたらいいのかカオスになる」
「カオスってなんだ」
「混乱して右往左往することだ」
ミスリーは、自分の弁当から、先ノ岬の弁当に、移している。先ノ岬は、ミスリーの反応から、先ノ岬の大事な話を、キチンと把握していると感じた。先ノ岬が話していることは、ミスリーのようなリーダーには、欠かせない話しだ。前のソウル工場の社長の澤田二郎も、権力のエクスタシーに負けて、先ノ岬プロジェクトを潰しにかかった。先ノ岬が３度も狙われたが、澤田二郎が係っていると、先ノ岬は考えている。
人は、自分の権力を守るために、とんでもないことをする。それが権力のエクスタシーだ。
ミスリーの弁当はおいしい。先ノ岬は完食した。
ミスリーは、コーヒーを煎れてきた。
「まだ少しの解放感の話しを聞いていないけど」
「人が最もクリエイティブになれるのは、支配度が少しある場合だ」
「少しではわからない」
「私はクリエイティブで生きたいと思っている」
「私は自分で貧乏だが事務所を持っている」
「先ノ岬の顧問料はいくらなんだ」
「20万円だ」
「わたしより少ない」
「顧問だからあたりまえだ」
「ソウルに来るのはどうなっているのだ」
「経費は別途請求している」
「誰があなたのメンドーをみているんだ」
「松下三郎さんだ」
「それでも安い」
「貧乏に暮らしているから問題はない」
「私は大きな支配度の中には入らないようにしている」
「私は集団で暮らさないと暮らせないから法律や習慣などの人間に欠かせないことを守る」

「私は自分で少しの解放感を調整できる」
「私がクリエイティブに生きるためだ」
「ミスリーはソウル工場の社長だ」
「ミスリー次第ではソウル工場のみんなの少しの解放感は少なくなる」
「ソウル工場の人達は私のように少しの解放感を調整できない」
「わたしも自分で何もできない」
「ミスリーは自分で調整しないといけない」
「そんなことは聞いたことがない」
「私のように自分で調整してくれ」
「リーダーは、自分の少しの解放感を自分で小さくする」
「自分の少しの解放感が小さくなると、みんなの少しの解放感を小さくする」
「わたしはどうすればいいのか」
「私をよく見ておくことだ」
「先ノ岬をお手本にすればいいのか」
「ソウル工場のみんなは、ミスリーのように、少しの解放感を大きくはできない」
「具体的にどうすればいいの？」
「規則やマニアルなどを多くしない」
「掟をキツクしないことか」
「ミスリーが、自分の知らないことをやられた時に、イヤになってしまう」
「ミスリーに権力のエクスタシーがあるから」
「稟議書を多用する」
「稟議書がここに積んである」
「ハンコ押して返せ」
「読んでない」
「ゼンブ承認で返せ」
「そうしたところでたいした問題は起きない」
「即決することがミスリーがやらないといけないことだ」
「そしたら稟議書はいらないけど」
「稟議書がなくなったら素晴らしい」

「止めてメールにする」
「ミスリー次第だ」
「全員にパソコンを配る」
「まだ40人くらいしかパソコンを持っていない」
「２６０名全員に配って連絡を社内メールに変える」
ミスリーは、話の途中で、総務の責任者を呼んだ。先ノ岬は、パソコンで今日の出来事を整理していた。ミスリーとやっていることが、今日は多い。
「全員にパソコン配るのは川口の本社に言わなくていいのか」
「ミスリーが川口を見て動きはじめたら遅れる」
「ミスリーは社長をクビになりたくないから川口を向きはじめる」
「理不尽なこともあるかもしれない」
「先ノ岬の秘書にしてくれないか」
「私は貧乏だ」
「ミスリーはどんな仕事でもできる」
「わたしも貧乏で暮らさないといけないのか」
「そうだ」
ミスリーは、総務のみんなところへ行った。全員にパソコンを配るように指示しに行ったようだ。かなりのお金のかかることも事実だ。
「１カ月くらいかかるけどやる」
「稟議書をなくす」
「お願いメールにした」
「しばらくはわたしへのお願いメールがいっぱいだと思う」
「今でもいっぱい」
「ミスリーが状況をよく把握しておかないといけない」
「航空母艦方式でやるしかないから」
「わかった」
「他に私の支配が強くなりそうなことはないか」
「私には書物がゼロだ」
「昔は３０００冊くらいあった」
「私は、その蔵書を見てほくそ笑んでいたところがある」
「今から考えるとバカバカしいし恥ずかしい」

「どうしたのか」

「捨てた」

「ミスリーは捨てるをコンセプトに生きないとリーダーを保てない」

ミスリーは、メモ帳に、何かを書いていた。

「録音しとけばよかった」

「アタマが理解するのではなくて身体が理解しないといけない」

「そうしないと身体が動かない」

「早速なにか捨てればいいのか」

「組織図を捨てればいいと思う」

「ミスリーはハンジョンなどの人を頼りに仕事をしないといけない」

「ソウルの縄文の工場を頼りにしても、コンクリートと配線でしかない」

「わたしの名刺も捨てるか」

黄金色のマナティ

〇ソウルの縄文チーム

「久しぶりにソウルに来ている」
先ノ岬一葉は、ヨウミンソに電話した。
「晩ごはん一緒に食べたかったけど」
残念そうにミスリーは言った。
ミスリーは、昨日先ノ岬に電話したことが、もうウソのようだった。
50人のソウルの縄文の工場の社員を、どうすればいいのか、せっぱ詰まっていた。それが、今日は、何事もないように、50名の社員は、チームに分かれて、自分のやるべきことを、追いかけている。
「先ノ岬はわたしに安らぎをもたらす」
先ノ岬は、いきなり言ったミスリーのことばに驚いた。
「わたしたな卸しの会議あるから」
ミスリーは、もう安心したように、ソウル工場の社長の仕事をしはじめた。
先ノ岬は、ミスリーに聞こえるように、ヨウミンソに電話をしたのだ。先ノ岬は、ミスリーが会議に出かけて、そのすぐ後に、先ノ岬特別チームの部屋に行った。
20日くらい、みんなの顔を見ていない。
パクヨンギとパクスジンとキムキンホも、先ノ岬が、ソウルの縄文の部屋に来るのを待っていた。
「お昼を一緒に食べたかったけど」
「ミスリーと話ながら食べたから」
「夜はヨウミンソさんですか？」
「明日お昼ここで食べましょう」
「わたしがお弁当作っていい？」
パクスジンが先ノ岬に聞いた。
「ソウヨウ社長は元気ですか？」
パクヨンギは、ジュソン電子の社員である。ソウヨウ社長にレンタルをお願

いしている。ソウルの縄文のハードの開発者だ。
「ハンジウンも張り切っています」
ハンジウンは、２つ目の、ソウルの縄文のボトルの会社の社長である。パクヨンギは、迷ってはいないようだった。
キムキンホは、先ほど、50名のソウルの縄文電子鍋工場の50人に話をした時に、通訳をしてくれた。
ソウル工場で、自動車電子部品の生産と販売が主力の仕事の中で、ひっそりと、ソウルの縄文の仕事をやってきた。
ソウルの縄文の工場に移された50名が、ソウルの縄文の工場の仕事に躊躇することと似ている。
先ノ岬には、それがよく理解できる。だからソウルの縄文の工場の50名に話をさせていただいた。
現代源田のソウル工場の業態は、ここのところ、大きく変化しようとしている。
「さっき50名のソウルの縄文の新しい工場で働く人に話をしたけど、みなさん、自動車の電子部品で働くつもりでここに来ているから、ソウルの縄文の工場で働くには、抵抗があります」
「キムキンホとパクスジンも、自動車の電子部品ではないソウルの縄文を生産販売することに、抵抗があったかもしれない」
「社員のこころにある抵抗感を理解しておくことが大事です」
「事実上、もしソウルの縄文がなかったら、ソウル工場はタイヘンだっただろうけど」
「パクヨンギもキムキンホもパクスジンも、謙虚に仕事を続けることが大切です」
「今は、ソウルの縄文が、みんなを助けている」
３人は、先ノ岬の話しを、しっかり聞いているようだった。
「ミスリーには話をしたんだけど、人は集団で働いているけど、ホントは、豹のようにカッコ良く生きたい」
「しかし、人間はひ弱だから、集団でみんなのチカラを集めなければ、強くなれなかった」
「しかし、ホントは、豹のように生きたかったというのが、ミソです」

「集団で働くけど、自由で、少しの解放感がなければ、人は、クリエイティブになれません」
「そうかといって、リーダーがいなければ、なにをしていいのかわかりません」
「人には、少しの解放感という集団の、支配被支配の、最適な位置があります」
「ミスリーには、今日お願いしました」
「ソウル工場のみんなが、少しの解放感を保つようにです」
「われわれはソウルの縄文を自由にやっている」
パクヨンギが言った。
「私は、ソウルの縄文の３人が感じている少しの解放感を、ソウル工場全体の少しの解放感にすることが大事だと思っています」
３人とも、なるほどという顔で先ノ岬の顔を見ていた。

〇毎月**10**台のマナティの生産
ヨウミンソの工場へ向かう車の中で、先ノ岬は、ミスリーの昨日の電話が、タイムリーだったと、つくづく感じていた。ソウル工場の社会は、大きく変化している。社会は、みんなのこころの集まったものだから、当然、ソウル工場の社会は動いている。特に、ミスリーの存在が大きい。ミスリーは、ソウル工場のリーダーである。ミスリーが、権力を発揮すれば、ソウル工場の少しの解放感は、狭まる。先ノ岬には、日本からの、現代源田の支配力で、ソウル工場の少しの解放感は、どんどん狭くなってきていたと感じている。だからミスリーなのだが、ミスリーが、よく理解しないといけない。
今日、ミスリーに、少しの解放感の話しができてよかったと感じていた。通常、このようなメンドーな話は、話す機会がない。本当は、リーダーにとって、大事なことなのだが、話すチャンスがない。

「しばらく」
ヨウミンソは、どういうわけだか、工場の玄関のところまで来ていた。ここで待っていたのだろう。

「４号車をつくったから見てくれ」
先ノ岬は、ヨウミンソが、４号車をつくっていたことなど聞いていなかった。ヨウミンソの２輪車も、そう多く売れているわけではないのに、ソウルのマナティの４号車を試作したのだ。
「マナティの製造許可がおりて、これからどうするのか」
「４号車が４台あるが連日レーンを走っている」
「２輪車のレーンか」
「今日で３日になる」
「何が心配なのか」
「耐久性だ」
厳重に管理されたマナティの部屋に入った。事実上、もうレーンで試乗しているから、秘密でもなくなったのだが、この部屋の機密性は、大事だった。ヨウミンソの社長室も荒らされて、ソウルのマナティも盗まれた。今は、もう、あり得ないと思う。誰がヨウミンソの部屋に侵入したか、わかっている。しかし、ヨウミンソは、先ノ岬に、何も言わない。もちろん、警察沙汰にはしない。
ヨウミンソは、よくわかっているのだ。
新しいことにチャレンジすると、必ず災いがあることを承知している。
ソウルのマナティーの部屋で、黄金色のソウルのマナティを見た。４号車の４台のうちの１台だと言った。
乗り込もうとした先ノ岬をさえぎって、ヨウミンソは、隣の、ソウルのマナティーの生産ラインへ連れて行った。自動車の生産ラインといっても、工房である。手作りで生産する。
「毎月10台しかつくらない」
「モニター試乗者をつのる」
「１台25万円だ」
「先ノ岬特別チームでやってくれ」
「現在10台の生産をしている」
「ナンバーもとれる」
キムハヌルが、生産ラインで、エンジンを取り付けていた。
「先ノ岬しばらくです」

キムハヌルは日本の会社に勤めていた。日本語ができる。ヨウミンソとは英語で話している。
「10台作っているのですか？」
「12月１日を目指して10台作っている」
「塗装していないが動く状態だ」
「４号車とどういう関係なのか」
「試作５号車になる」

「ミスリー今は何をしているのか」
「ヨウミンソに行ったのか」
「相談したことがあるが空かないか」
「空かないが空ける」
「待っていいか」
「緊急なのか」
「12月１日から毎月10名づつソウルのマナティの試乗者をつのりたい」
「もう生産しているのか」
「先ノ岬特別チームで販売したい」
「販売するのか」
「１台25万円だ」
「１台１０００万ウオンにしてくれ」
「ソウルの縄文が評判がいいので、ソウルのマナティを同じホームページで販売したら、すぐに、売れてしまう」
「相談したい」
「６時から会議があるからそれまで空ける」
「キムキンホも一緒に行く」
「わかった」
先ノ岬は、生産中の10台の他につくっている11台目のマナティに乗れると言われて、試乗することにした。
川の流れのような音がする。わざわざ音を付けているらしい。音が全くしないのだ。つくっている坂道も昇ってみたが問題はなかった。
「やっぱ１０００万ウオンにしてください」

ミスリーは、試乗して、降りてきて、言った。
「多分、プレミアがつく」
「それでも、毎月10台の予約を抽選でやることにする」
「２輪車のショールームにいたヨンジュをレンタルして欲しい」
ヨウミンソは、すぐにヨンジュを呼んだ。
「わたしにソウルのマナティの販売の仕事をやらせてください」
ミスリーが、なぜヨンジュを知っているのか、わからない。
「水をもらいにヨンジュのとこへ行って話した」

〇久しぶりのヨウミンソ
「ビールもウイスキーもワインもあるからやっておいてくれ」
ミスリーとキムキンホが急いでソウル工場に帰った後、ヨウミンソは、マナティの部屋のキッチンで、食事をつくりはじめた。
調理をしている時のヨウミンソは、楽しそうである。ごはんも炊いているようだった。ここだと、安心して何でも話せる。
２輪車のヨウミンソの部屋は盗聴されてマナティも盗まれて散々だった。この部屋は、完璧だろう。
「先に少し肉を食べよう」
ヨウミンソは、テーブルに来るように先ノ岬に言った。
先ノ岬はウイスキーを氷で割った。ヨウミンソはビールを飲んだ。
「２輪車は順調なのか」
「あまり変化はない」
「何か気になることはないのか」
「焼けてきた」
「野菜をいっぱい食べろ」
ソウルの人は、野菜をたくさん食べることを勧める。誰でもが同じようにする。
「先ノ岬には何もなくなったのか」
「３度も殺されかけた」
「私には何もなくなった」

「跡はつけられてないのか」
「気配がない」
「ヨウミンソはどうなのだ」
「跡をつけられている」
「いつからだ」
「10日くらい前からだ」
「ミスリーは何か言っていないか」
「ミスリーは、ソウル工場の社長になって、工場の社員とのコミュニケーションで困っていた」
「朝から、ずっと話していた」
「先ノ岬の顔を見ると安心だろう」
「ヨウミンソをつけているのは誰だろう」
「現代源田の人ではなくなったから、自動車の関係者かもしれない」
「まだ何も手を出していないので心配をしてもしようがない」
「ミスリーに手を出されると先ノ岬も弱くなる」
ヨウミンソは、先ノ岬のことをよくわかっている。
ミスリーに手を出されると、先ノ岬は辛くなる。
先ノ岬は挑戦者だ。いままでにも、何度も、襲われた。ソウルの縄文のことでも、３度も命を狙われた。ヨウミンソも挑戦者だ。
挑戦者とは、社会が、昨日と同じことを今日もやってしまう習性があることをわかっていて、次第に、純粋になっていくことをわかっていて、そして、崩壊に追い込まれることもわかっていて、反骨して、新しいことに手を出す人のことだ。
挑戦者は、昨日と同じことをやっていたい悪魔から、狙われて、殺されることになる。人の歴史では、例外がない。
先ノ岬が３度も狙われたのは、現代源田の、見えざる悪魔からだった。
ヨウミンソは、３度狙われた先ノ岬を助けた。挑戦者を助けると、ロクなことはない。ミスリーも挑戦者の仲間だ。ロクなことはない。しかし、現代源田の悪魔は、いなくなったのかもしれない。
ヨウミンソをつけているのは、また違った悪魔なのかもしれない。
先ノ岬は、おいしいヨウミンソのごはんを食べながら、ヨウミンソと話しを

しながら、考えていた。
南雲一郎から電話がかかった。おかしな時間である。夜の８時だ。
「もしもし」
「先日相談のあったマナティのことですが」
「私は誰も乗りださないし市場もないという話しをしたのですが」
「ソウルで製造認可を受けたという話しですが」
先ノ岬は、何も話さなかった。
南雲は困ったようで、更に、話しを続けた。
「状況をお知らせいただければ相談にものれるかもしれないと思いまして」
先ノ岬は、黙っていた。
「帰りに大崎に寄っていただければと思っています」
先ノ岬は、黙っていた。
「誰だ」
「南雲一郎だ」
「なんだ」
「１人乗り自動車の記事を書いた研究者だ」
「技術者か」
「今は何かよくわからない研究者だ」
「自動車業界の記事を書いているのか」
「多分そうだ」
「気になったことがある」
「この時間に電話がきたことだ」
「私がヨウミンソの部屋にいることを知って電話している可能性がある」
「マナティという名前を知っている人は限られているのにマナティと言った」
「帰りに大崎に寄ってくれと言った」
「何かおかしい」
ヨウミンソも、箸を止めて、先ノ岬の話しを聞いていた。
「ソウルの縄文の時は、現代源田の悪魔に襲われた」
「今度は、自動車業界の悪魔かもしれない」
「こっちの方が大きくてタイヘンだ」

ヨウミンソは、先ノ岬が、ミスリーに、どんな話しをしたのか知りたがった。先ノ岬は、少しの解放感の話しをした。よろいの話しをした。なぜ先ノ岬が、３度も狙われたのか、話した。
「もう２時になるから寝よう」
「朝はどうするのか」
「ソウル工場で先ノ岬特別チームとお昼を食べることになっている」
「朝はここでいいのか」
ヨウミンソは、２輪車の部屋に行った。２輪車の部屋のソファーもベッドになる。
先ノ岬は、マナティの部屋のソファーで眠ることにした。
「シャワーは２輪車の部屋にある」
「わかってる」

東京のヨウミンソ

〇南雲一郎

先ノ岬は、翌日の夕方には、東京に帰ってきた。そして、大崎の南雲一郎のオフィスに向かった。

「お待ちしていました」

「ソウルのマナティをソウルで販売する準備を進めていると思いますが、どういう体制ですか？」

「現在検討中です」

「日本で販売する予定ですか？」

「そこも検討中です」

「日本では、販売許可を得ることが難しいと思います」

「簡単だとは考えておりません」

先ノ岬は、話しが録音されているだろうと思っていた。先ノ岬が知りたいことは、なぜ南雲一郎が連絡してきたのかを、知りたいのだ。何もなければ、わざわざ、連絡してこない。

「その後、南雲さんは、１人乗り自動車について、どのように思われていますか？」

「市場ができないだろうから、誰もリスクを冒して開発しないという意見でした」

「でも先ノ岬さんは開発しましたけど」

「どういうつもりですか？」

「南雲さんは、１人乗り自動車の可能性を書いておられましたが」

「市民生活上では意味がないことはないのですが、自動車は開発費がかかるから、マーケットがないと難しいです」

「市民生活上とはどういうことですか？」

「高齢者の自動車として適当ではないかと思います」

「高齢社会ですけど」

「現実は難しいと思います」

「どうしてですか？」
「大は小を兼ねるです」
「若者が乗れる自動車は高齢者も乗れるということですか？」
「自動車も良くなってきているから」
さっきから２度目の電話が、南雲一郎にかかっていた。
「来客中ですから」
３度目の電話だった。
「ちょっと失礼します」
「どうぞ」
さして広くないオフィスだ。南雲一郎は、オフィスの外に出て電話をしはじめた。
先ノ岬は、録画もされている気がした。
「どうもすみません」
「いつからソウルで販売するのですか？」
先ノ岬は、ケータイを取り出して、電話を装った。
「了解しました」
そして、先ノ岬は、丁重にお礼を言った。
「今後も参考意見をお聞かせいただけますようお願いいたします」
「請求書を送らせていただいていいですか？」
「帰りに寄ってくださいとおっしゃったのは南雲さんですから」
南雲一郎は、困った顔をした。
「失礼いたします」
先ノ岬一葉は、今日から、先ノ岬にも、尾行がつくだろうと思った。何か、また見えざる悪魔が動いている。南雲一郎は、まだ見えないが、何かの見えざる悪魔に関与している。先ノ岬のカンである。

先ノ岬は、電車で考えていた。電車が１番安全である。ホームだけ気をつけないといけない。日本の電車では、簡単に、線路に落ちる。なぜこういう構造になっているのか、よくわからない。昔、どこの街にでもあったチンチン電車であれば、これでいいのだろうが。ものすごいスピードで進入する電車だ。とても信じられない。

また先ノ岬は、今日から狙われる。多分、ソウルのマナティーをよく思わない悪魔の仕業だ。先ノ岬より、今度は、ヨウミンソの方が危ない。
先ノ岬は、電車の中だったが、空いていることもあって、ヨウミンソに電話した。
「南雲一郎に会ってきた」
「私のカンだが、南雲一郎は、ソウルのマナティを潰そうとする悪魔の優等生だ」
「私から、いろいろ聞き出そうとしたが、何も話さなかった」
「ヨウミンソを傷つければ、ソウルのマナティは動かなくなる」
「先ノ岬を傷つけても同じだ」
「さっきから、またつけられはじめた」
「電車に乗っている」
「いつものことだが気をつけろ」
ヨウミンソに気をつけるように電話したのだが、ヨウミンソは、先ノ岬のことを気遣っていた。
国分寺の駅からマンションまで、すぐ近くなのだが、誰かが、後にいる気配がする。

〇ヨウミンソが襲われる
11月になった。
ミスリーから、10月の経営状況を知らせてきた。現代源田のソウル工場の経営状況だ。そして、先ノ岬特別チームの経営状況だ。
ソウル工場は、ソウルの縄文が助けている。10月は、先ノ岬特別チームから２０００万ウオンを振り込んだらしい。経常利益の10%だ。契約である。
11月１日に、堺に２００００個のソウルの縄文の日本仕様を出荷したらしい。ますます、ソウルの縄文の恩恵を受けることになる。
「先ノ岬は電車と自動車に気をつけろ、自分の車は持っていないのか、ソウルの工場は危機的状況はなくなってきている」
ミスリーのメールは、毎日、ガンガンやってくる。
「今は、もう１つの顧問の仕事が忙しい、しばらくしたら、ソウルに行く」

先ノ岬は、ミスリーからメールがあったら、すぐに返事をすることにしている。何も伝えることがなくても、返事をする。
「東京駅の駅中のお店でカレーライスを食べている」
ヨウミンソから電話があった。
「何をしに来たのだ」
「ソウルのマナティの日本での販売許可願を出した」
「霞が関か」
「そうだ」
「何もないか」
「書類は受け取ってもらった」
「審査があるのか」
「韓国では製造許可と販売許可を得たが日本ではわからない」
「今日は、このままカレーライスを食べてソウルに帰る」
東京駅駅中のカレーライスのお店だと安心だ。

先ノ岬は、国分寺のマンションで、２つ目の顧問の難しい出来事の解決策を考えていた。
いきなり、ヨウショウから電話があった。英語である。
「すぐに来てくれ、ヨウミンソが襲われた」
「どこだ」
ヨウショウは、電話番号を言った。虎ノ門の病院である。
先ノ岬は、マンションのカギを締め忘れないように気をつけた。ガスも電気もである。バックアップのメモリースティックも持った。パソコンも持った。
国分寺からだと電車の方が速い。
玄関の近くでヨウショウが待っていた。
「どんな状態なのだ」
「３メートルくらい飛ばされた」
「一緒にいたのか」
「ヨウミンソはわたしを突き飛ばして自分だけ車に飛ばされた」
「どこで？」

「大きな本屋さんを出たところ」
「八重洲なのか」
「東京駅の近く」
先ノ岬は、ヨウミンソのように、黒豹の感じではない。嗅覚や触覚が、そこまで鋭くない。ヨウミンソが襲われそうだと、察することができない。ヨウミンソは、先ノ岬が襲われることを察知できるかもしれない。
「大丈夫なのか」
「どこもおかしいとは思わない」
救急車で搬送されたのだから検査の結果が出るまで動けないだろう。
「忙しい」
「ヨウショウと北京に行かないといけない」
「ソウルのマナティの販売許可のことか」
「書類をヨウショウにお願いしてある」
「車はどんな車なのか」
「黒のセダンで日本の国産車だと思う」
「ナンバーを見るヒマはなかった」
先ノ岬は、ヨウショウと一緒に東京に来たことが良くないと言おうとした。しかし、メンドーな書類をゼンブ、ヨウショウにつくってもらっているのだろう。一緒にいないといけない。先ノ岬は、経験上、一緒に女性がいると、守る範囲が大きくなって、自分を守りにくいことを知っている。だから、先ノ岬は、常に１人で動く。
それにしても、ヨウミンソとは、どういう男なのだろう。ヨウショウを突き飛ばしたということは、車が自分に当たる瞬間を知っていることになる。先ノ岬の身体は、そういうものではない。弱くはないが、ヨウミンソのようには強くはない。
先ノ岬は、羽田に急いだ。タクシーである。病院にいるタクシーに乗ったので、見られたかもしれない。いきなりタクシーに乗ったつもりである。ヨウショウを上海に帰さないといけない。東京での仕事は終わっている。ヨウショウがすぐに上海に帰ることなど、だれも考えない。誰も思いつかないようなことをするのが、こういう時には好ましい。ヨウミンソは、襲った車を訴えたりしない。事件にはならない。

「ヨウミンソのソバにいたいかもしれないけど、今は、ヨウショウも危ないと思わないといけない」
「わかっている」
ヨウショウは、気丈だった。しっかりした目をして、搭乗して行った。多分、誰にもつけられていない気がした。
先ノ岬は、そっと、またタクシーで、虎ノ門の病院に帰った。
「早かった」
時間を見ると、１時間とちょっとだった。決断が素早いと、なんでも、好転する。
「ヨウショウはしっかりした女性だ」
「大事にしてやれ」
「明日また早く来る」
「マンションに帰るのか」
「ここには泊まれない」
「明日早くに一旦ソウルに帰るかもしれない」
「わかった」

〇北京のヨウミンソ

先ノ岬は、２つ目の顧問の難題に手こずっていた。昨日は、朝の３時まで考え込んでいた。今日は、朝の８時まで、目が覚めなかった。顧問の会社に起こされた。
電話中に、ヨウミンソから電話があった。
「金浦空港にいる、これから北京に乗り替える」
「わかった」
ヨウミンソは、虎ノ門に来ても、自分はいないと言いたかったのだろう。朝の６時の便だ。
ヨウミンソもよくわかっている。北京に行くつもりだが、金浦に行った。誰だかわからないが、もう、ヨウミンソがソウルに帰ったことは知っているだろう。
先ノ岬は、考えなければならない。この悪魔との戦いを考えないといけな

い。ヨウミンソが日本で襲われた意味を考えないといけない。
先ノ岬が襲われそうもない雰囲気も、考えないといけない。
15時になった。依然として、先ノ岬は、別の顧問の難問に追われていた。
「北京の役所にソウルのマナティの販売申請をしてきた」
「キムハヌルに電話してもいいか」
「なんだ」
「キムハヌルがケガをしてもソウルのマナティは発売できない」
「わかった」
先ノ岬は、キムハヌルに電話をした。
「まだヨウミンソに会ってはいないと思うが、昨日、ヨウミンソが、東京で自動車に襲われた」
「今日は北京に行くと言っていた」
「ソウルのマナティを妨害しようとしているのだと思う」
「キムハヌルのことも心配だ」
「気をつけてくれ」
先ノ岬は、キムハヌルに電話している時に、川口に出向いてこようと思った。日本と中国に、ソウルのマナティの販売許可申請をしたことを伝えないといけないと思った。多分、メールでも足りることだが、先ノ岬が動いてみようと思った。カンでしかない。

「今日は北京に泊まる」
「何もないのか」
「気配がしない」
「北京にいることが安全そうだ」
「今、川口に向かっているが、日本と中国への申請書類の最初のページを送ってくれ」
「すぐ送る」
ヨウミンソには、独特の、気配を感じるものがあるのだろう。北京は安全そうだと言った。誰も、今の北京に、ヨウミンソがいることが、理解できないだろう。昨日八重洲で３メートル車に飛ばされたのだ。
先ノ岬は、16時20分に川口工場に入った。

「ソウルのマナティの日本と中国への販売許可申請をしました」
先ノ岬は、松下三郎へ報告した。
「ミスリーからの10月の経営状況報告が来ました」
「まだ25歳で女性なのに、感謝してます」
「ソウル工場売却かと思っていたのですが」
「売却先もないだろうし」
「予断は許しませんが、少しは安心できます」
松下三郎は、フツウの人の感覚である。松下三郎は、現代源田を退職すれば、フツウの隣のおじさんになるだろう。ドブ掃除に出てそうなフツウのおじさんである。まだ、これから、役員になって、ひと働きしないといけない。
営業本部長と経営企画室長を兼務している三枝湊のところにも、報告に行った。三枝湊は、社長が、篠田三太郎から母親の篠田由美子に代った時、経営企画室長から営業本部長になった。しかも、経営企画室長も兼務している。事実上、現代源田を仕切る立場になっている。
三枝湊は、会議中だったが出てきた。
「ソウルの方が活気があるかもしれません」
「現代源田が自分で車を販売することには抵抗があるだろうけど」
「販売は先ノ岬さんのチームで考えておいてください」
現代源田の営業部は、自分で車を販売することには、言訳でさえ難しいだろう。現代源田の悪魔は、ソウルのマナティのケースでは、言訳のことだろう。
「お前らで販売させるな」
こう言われているだろう。
「会議中にありがとうございました」
先ノ岬は、三枝湊に、お礼を言った。
「社長にも知らせておいていただけますか」
先ノ岬は、篠田由美子の社長室に向かった。
「しばらく」
「日本と中国に、ソウルのマナティの販売を申請しましたので、お知らせに参りました」

「昨日大手の自動車会社にあいさつに行ったのですが、釘を刺されました」
「うわさが流れています」
「どういう対応をされますか？」
「あなたを悪者にするしかないでしょ？」
「それで言訳になりますか？」
「四人乗りの自動車はやりません」
「高齢者とか女性用の２輪車しかやりません」
「みなさんが懸念するような数ではありません」
「現代源田社内も心配するのではないですか？」
「自動車の事故は会社を潰しかねない」
「あなたのチームで完結させてください」
「私を切るだけで済ませたいのですか？」
「そうだ」
「用意してないけどすぐできるから家でごはん食べましょう」
「会議が１つあるから１時間後に来てください」

〇篠田三太郎
「いま川口にいる」
「現代源田は、ソウルのマナティに反対しないようだ」
「事故があったら私を切る」
「オレを襲ったのは誰だ」
「それを知りたくて現代源田に来た」
「現代源田ではないような気がする」
先ノ岬は、ヨウミンソに状況を伝えた。今度の悪魔が、ひょっとすると、現代源田にはいないかもしれないという連絡でもあった。
ヨウミンソと先ノ岬だけに伝わることかもしれない。ヨウミンソは、八重洲で黒のセダンに３メートル飛ばされたが、交通事故として処理していない。ヨウミンソには時間がないのだ。先に進まないといけない。なぜ自分が襲われるのか、わかっている。承知をしている。覚悟をしている。先ノ岬も、３度も襲われた。覚悟はしている。

ヨウミンソと先ノ岬は、お互いに覚悟してやっている。
「すき焼きにしたの」
「お肉とか買ってきてもらってるからすぐ食べられる」
「ごはんも炊いてもらっている」
「ワインにするから」
篠田由美子は、キッチンの台所で、着替えもせずに、すき焼きをはじめた。大皿に牛肉やネギや春菊や豆腐やこんにゃくが乗せられていた。誰がやったのだろう。誰も出て来ない。篠田由美子は、カギを開けたのではなかった。誰かがこの家にいる。
「今日は嫁が準備してくれたの」
「隣に住んでいるんでしょ？」
「三太郎は高野山に籠っています」
「あなたには感謝しています」
「その話しは止めましょう」
先ノ岬のこういう態度を、多分、誰も理解できないだろうと、先ノ岬は思う。３度も襲われたのだ。殺人未遂だ。お互いに話さないが、誰が謀ったのか、先ノ岬にはわかる。先ノ岬は、人を恨んだり悪く言ったりしない。もちろん襲ったりしないし戦わない。なぜかというと、人に悪さをするのは、すべての人が持っている、見えざる悪魔であると思っているからだ。先ノ岬が戦っているのは、見えざる悪魔である。篠田三太郎は、よく決心したと思っている。篠田三太郎を恨んでもいない。
「どうぞたくさん食べて」
篠田由美子は、母親のように言った。
「聞きたいことがある」
「先ノ岬さんは、ずっとこうやって生きているの？」
「これが私の生き方です」
「あなたは現代源田に幸福をもたらす」
「だけど誤解もされる」
「あなたは難しい人だ」
「どうやって付き合えばいいの？」
「私はシンプルです」

「私は、人が動く押しボタンにのみに忠実に従っています」
「人が動く押しボタンって？」
「愛ですけど」
「三太郎は？」
「よろいにもボタンがあるから」
「社長のよろいね」
「篠田家のよろいでしょ？あなたにも責任がある」
篠田由美子は、箸を止めて、じっと先ノ岬一葉を見ていた。

〇東京で２度目の襲撃

「今日の１便で羽田に行く」
「書類の説明をするように指示されている」
ヨウミンソから電話があった。11月中旬の寒い日だった。だいたい、11月中旬に、強烈に寒い日がやってくる。
先ノ岬は、ネットで時刻表を見て、羽田に急いだ。ジーンズにダウンを着た。ヨウミンソだって、先ノ岬とは思わない。マンションを出る時も、誰もいなかった羽田国際線の到着ロビーでヨウミンソを待った。遠くで、恋人を待つ雰囲気にしてあった。自分だけではなくて、誰かが、ヨウミンソの到着を待っているだろうと思った。先日の東京では、ヨウミンソを襲った。多分、事故を装う。しかし、ヨウミンソは、東京に来ざるを得ない。多分、ヨウショウも一緒だ。
誰にも知られないように、柱の陰にいるのだが、こういうのは、ヨウミンソの方が似合う。
最後の数人になって、ヨウミンソとヨウショウが出てきた。そのまま霞が関に行きそうな構えである。どこかに電話している。
タクシー乗り場に向かっている。
先ノ岬は、急いで先にタクシー乗り場に向かった。ヨウミンソとヨウショウがタクシー乗り場に並ぶ時、先ノ岬は、タクシーに乗っていた。行き先はわかっているし、誰も、手は出さない。
３分もしなくて、ヨウミンソとヨウショウが乗っているタクシーがやってき

た。先ノ岬は、40メートル離れた通りで、見るともなく、タクシーから降りるヨウミンソとヨウショウを見ていた。２人は、急いでいるように、霞が関のビルに入っていった。
後から追っていそうな車はなかった。
先ノ岬は、少し、ホッとしていた。そして、これから１時間くらいだろうか、どうやって時間を潰すか、考えた。ここに、ずっと立っていることもできない。
「終わったら建物の中から電話してくれ」
「わかった」
先ノ岬は、細い通りに向かった。
遠回りをして賑やかな所へ出ようと思った。
後には誰もいない。

先ノ岬は、パソコンを使ってもいいか聞いた。メールを調べた。
「ソウルの縄文の販売のことで明日堺に行く」
堺にソウルから２００００個のソウルの縄文を送ったはずだが、その後を聞いていない。もし、今日何もなければ、明日堺に行こうと思った。ミスリーには、「わかった」としか返事をしなかった。
「今説明が終わってこれから帰る」
「わかった」
先ノ岬は走った。これから帰るということは羽田に向かうことだ。
先ノ岬は、タクシーを止めた。多分、ヨウミンソはタクシーを待っている。地下鉄に乗ってくれればいいが、乗らないだろう。
「羽田に行ってほしいんだけど、あの２人を拾ってくれませんか」
運転手は、曲がれないのだろう。雰囲気で、急いでいることがわかったのだろう。かなりのスピードで曲がってターンした。
後から黒のセダンが、猛スピードで突っ込んでくるのがわかった。タクシーが急転回したので、クラクションを鳴らして、急ブレーキをかけた。危うく衝突するところだった。黒のセダンは、少し右に出て、そのまま走り去った。
もしタクシーが急転回しなかったら、黒のセダンは、ヨウミンソとヨウショ

ウに突っ込んでいただろう。
「ヨウミンソ乗って」
ヨウミンソとヨウショウは、一瞬、先ノ岬とは思わなかったのだろう。後に下がった。今の状況を目の前で見ていた。
ヨウミンソとヨウショウは、後に乗り込んだ。
「羽田ですか？」
「お願いします」
先ノ岬は、何も話さなかった。ヨウミンソもヨウショウも、何も話さない。
ヨウミンソとヨウショウは、カウンターに向かった。
「時間があるから何か食べよう」
ここでは、誰も手を出さないだろう。ヨウショウが心配である。東京に来る度に襲われる。先日は、八重洲のブックセンターの前だった。今日は霞が関だ。震えるほど怖がってあたりまえである。
「パスタとピザを食べよう」
ヨウミンソは、さっさと、イタリアンのレストランに入って行った。
ヨウミンソとヨウショウは、緊張が解けたかのように、ピザをほうばった。
「どうもありがとう」
「もし先ノ岬が現われなかったら危なかった」
「よく似合ってる」
ヨウミンソは、腹が据わっている。

ソウルのマナティ試乗車

〇堺のミスリー

先ノ岬は、朝１番の新幹線で、堺に向かった。
新幹線で、メールを確認した。ヨウショウから、今、中山公園に着いたと短いメールがきた。昨日は、ヨウミンソのマンションにいたのだろう。ミスリーからもメールがきていた。
「今日は堺に来るのか」
「11時には堺に着ける」
多分、ミスリーは、もう堺にいるだろう。早朝の飛行機だろう。
少し考えようと思った。
ヨウミンソが襲われたのは、２度とも、東京である。しかも、八重洲と霞が関である。襲うような場所ではない。それともプロなのだろうか。どうしても、ヨウミンソを襲う必要があるらしい。ソウルで不審な動きがない。まだないのか、ソウルでは、何もしないのか。よくわからない。どうも、東京にいる見えざる悪魔のような気がしてきた。まだよくわからない。しかも、ソウルのマナティに関する悪魔のようだ。
先ノ岬は、ソウルの縄文に何も起きそうもないことが、少しは、気楽になる。今のところ、ミスリーの周辺を気遣うこともない。
多分、先ノ岬は、少し眠った。
パソコンが動いたような気がした。誰かが、早足に新幹線のドアから出て行った。１番の席にしてもらっている。電源の関係でパソコンが使いやすい。黒っぽい背広の男だった。そのまま、走って前の車両に移った。
パソコンの内容が見たかったのかパソコンを盗もうとしたのか。満員の新幹線で、大胆である。それとも、少し揺れて触っただけなのだろうか。眠っていたので、よくわからない。先ノ岬も、跡をつけられている。

「家電大型量販店に入れることにした」
「まず１社だけだけど」

「さっき牧野さんと決めてきた」
「大阪にバイヤーがいるのか」
「ソウルにある大型スーパーマーケットと同じ会社と２社で、11月は１４０００個になる」
「ネット販売で６０００個はストックしてある」
「２００００個ギリギリだ」
「今日大型量販店に入れられたので安心した」
ミスリーは素早い。少し心配だった２００００個のソウルの縄文を、アッという間に片づける。
「それで何をしているのだ」
「お昼の用意をしている」
ミスリーは、ソウルから、食材を持ってきて、お昼ごはんをつくろうとしている。お昼を用意するということは、夜の便で帰ろうとしている。羽田よりも、関空が、ソウルは近い。
「いいか？」
報告はいいかと聞いている。ごはんの用意をしたいのだ。炊飯器はグツグツ言っている。

先ノ岬一葉は、源田雄二の部屋に行ってみた。いるかどうかもわからない。連絡もしていない。
「いらっしゃい」
源田雄二は、何かをしていたのだが、先ノ岬を見て止めた。
「どうぞ」
「もうすぐお昼だけど」
「ミスリーがソウルから来ていてお昼をつくっていますので」
考えてみたらおかしな話しだ。ミスリーは、ソウル工場の社長である。源田雄二と同じ立場だ。それが、堺の先ノ岬特別チームで、お昼ごはんの用意をしているのだ。
「ソウルのマナティはいつから生産するのですか？」
「生産を開始しています」
「販売許可は降りているのでしょ？」

「ナンバーをもらえます」
「日本ではまだ乗れないんだ」
ミスリーは、明日ソウルに帰ったら、ネットで、ソウルのマナティ10台の、試乗車販売の告知をするだろうと思う。
日本の現代源田では、源田雄二でさえ、ソウルのマナティの発売が、気になっている。気になっているのだが、情報がないことにも驚いてもいる。
「お昼ごはんの用意ができました」
飯沼聡子から電話だった。
「すみませんまたまいりますので」
先ノ岬は、ホッとした。
このまま源田雄二と一緒にいたら、何から何まで聞かれてしまう。答えないのもおかしい。
韓国料理は、どうしても、こうなる。ヨウミンソも、先ノ岬に、自分のつくったごはんを食べたせたがる。外に出ない。危ないこともあるが。ミスリーも、自分でお昼をつくりたがる。料理が、輪になって食べることに向いているのかもしれない。みんなで食べることに向いている。歓待しているのだろう。韓国料理は、品数が多い。そして、先ノ岬一葉が知っている限り、ソウルの人は、ごはんの勧め上手だ。
ミスリーは、まだ25歳である。ソウルの縄文の電子回路の開発者の斎藤咲子と変わらない。見た目も、変わらない。ただ、ソウルから食材を持ってきて、みんなに食べさせたいとは、日本の女性は思わない。思っても実行しない。それを、ミスリーは、平気でやってしまう。
「明日、ソウルのマナティの試乗車販売をオープンする」
「１０００万ウオンで10台だ」
「ソウルの縄文と同じ、現代源田のブランドだから、アッという間に10台になる」
「オープンの時間は明日の朝決めようと思う」
「これが明日の写真だけど」
「黄金だったけどシルバーにしたのですか？」
「塗りはオーダーです」
「納品まで１カ月かかる」

「こんな車ははじめてだ」
「ソウルのマナティは黄金が似合う」
みんなでワイワイしゃべりながら、お昼ごはんになる。

〇12月15日の10名
「起きてる？」
「ソウルのマナティをオープンしたから」
先ノ岬は、もう１つの顧問の難問にアタマを痛めていた。
「メールしたからクリックして」
「わかった」
「もう６人だからもうすぐ終了を出す」
先ノ岬は、慌ててクリックした。
韓国語なのでよくわからない。現代源田とソウルのマナティの字がはっきりわかる。
試乗車販売は終了しましたが表示された。
アッという間だった。
「12月15日に今日の10台出す」
ヨウミンソが電話してきた。
「12月の10台に１人担当をつける」
「個別に車の世話をする」
「全員ネットを自在に使える人だ」
ネットで注文をもらったのだから当たり前なのか。
「モニターの総責任者は辛島明人だ」
先ノ岬は、聞いていなかったが、これでいいと思った。
「しっかりモニターしていくから」
多分、ヨウミンソの２輪車も、このようにしているのだろう。ヨウミンソのファンが乗っているだけだ。
「ヨウミンソから電話があったんだけど」
辛島明人から電話があった。
「モニターの総責任者をやってくれないかだけど」

「ソウルに行ってきていいか」
「私に断らなくても自分で判断して行ってください」
そう答えている自分がおかしくなった。先ノ岬は、松下三郎に電話しなければ動けない。しかも、現代源田では、女性の海外出張など習慣がなかった。ミスリーは、誰にも断らずに、堺にやってくる。上海にも行っているだろう。先ノ岬特別チームだけが、現代源田では、習慣を守っていない。
先ノ岬は、現代源田全体が、いつかは、こうなるだろうと思っている。先ノ岬特別チームには、起案書や稟議書がない。あるのは、独立採算でやっているから、経費明細や収入明細と売上や利益明細だ。そこには、出張の明細などが出てくる。これでいいのだと思っている。いつか、三枝湊に、起案書をつくってくれと言われるだろうが、独立採算を盾にしようと思っている。
少ない人数でやっていくためには、起案書システムなど余計なことをやってはいけないと思っている。ただ、スピーディーな実績把握だけはやらないと、説得できないだろう。
ミスリーから暗号付のメールがきた。試乗モニター10名である。辛島明人とヨウミンソの社員１名で、10名を訪問させていただくと書いてあった。全員、ソウル近郊に住んでいる。若者は、１人しかいない。女性が２人に、60歳の女性が２人に男性が４名だ。70歳代の男性が１人だ。
夕方だった。
「明日北京から呼ばれた」
「耐久テストの結果を持って行く」
「東京はまだ何もない」
「今晩は北京のホテルに泊まる」
先ノ岬は、もう１つの顧問の難問に苦慮している。ずっと、朝から考え込んでいる。しかし、手は、ネットのホテルの検索をしている。ヨウミンソが北京で泊まるホテルは聞いている。王府井の少し外れだ。予約をして使い慣れたトランクを取り出して、パソコンのバックアップをはじめた。なぜか、身体が動いてしまう。
そして、もう１つの顧問の会社の担当者に電話した。
「まだグッドアイデアがない」
先ノ岬は、ジーンズにダウンにした。12月が近い北京は寒いだろう。しか

も、多分誰にも会わない。松下三郎にもミスリーにも、北京に行くことを話さない。
もしかしたら、跡を追うオトコが知るかもしれない。
電気のブレーカーを落として、ガスの元栓を締めて、しっかり、２重のカギを締めた。ヒゲは剃ってない。北京のホテルで剃ろう。とにかく、急がないといけない。
多分、ヨウミンソは、北京で襲われる。八重洲と霞が関と、次は北京になる。先ノ岬のカンだった。多分、ソウルでは襲われないだろう。これもカンだった。誰がやっているのか、見当もつかない。
成田19時である。今晩中に王府井に着ける。

〇王府井のホテルで

４時間乗ったが、考え込んでいた。シミュレーションをしていた。カンではあるが、ヨウミンソが北京で狙われる。ホテルだろうか。明日の朝だろうか。北京からソウルに帰る時だろうか。
先ノ岬は、車を飛ばして成田に来たが、跡はつけられていないようだった。ギリギリで19時発に乗った。
先ノ岬は、この４時間に、何かが起こってしまうことが気になっていた。連絡がとれない。
22時には、王府井の通りから少し離れたホテルの着いた。
「どうしたの？こんなに遅く」
ミスリーは、驚いていた。
「間違えて電話した」
ヨウミンソにも何もなかったのだろう。ミスリーにも何もなかった。ヨウミンソが動くと、一緒に、何かが動いている。気になる。

ホテルの朝ごはんは７時からである。先ノ岬は、レストランの前のロビーで新聞を読んでいた。レストランからコーヒーを注いできた。パンを２切れ持ってきた。７時30分になった時、ヨウミンソがヨウショウと話しをしながら、レストランに入って行った。先ノ岬には気がつかなかった。横向きに

座っていた。誰も、後についていない。先ノ岬は、ホテルのロビーに降りて、チェックアウトをした。多分、誰も先ノ岬だとは気がつかない。調べればわかる。偽名など使っていない。気になる男が２人いる。通りに出てみた。路地を入っているので、大きな通りではない。ホテルの前にタクシーはいない。

先ノ岬は、またレストランの前のロビーに戻った。新聞とパンは片づけてあった。ウエイターが慌てて新聞を持ってきてくれた。

ヨウミンソを待っているだけだ。新聞を読んでいるわけではない。中国語の新聞なんか読めない。

先ノ岬は、経験から、ホテルを出る時に襲われやすいことを知っている。タクシーを待つからだ。ホテルにタクシーがいない。街中のホテルである。

先ノ岬は、タクシーを待った。どういうわけか、誰も、先ノ岬を襲わないだろうと思った。今狙われているのは、ヨウミンソだ。先ノ岬は、常に、タクシーを待つ時に狙われる。油断することもある。

タクシーが止まった。

「お客さんがホテルから出てくるからちょっと待ってくれないか」

先ノ岬は、１００００元札を渡した。

先ノ岬もタクシーに乗って待っていた。

10分後だった。ヨウミンソとヨウショウが、話ながら出てきた。ヨウショウは、ファッションモデルにしか見えない。

２人は、少し傾斜を昇って、タクシーを待つために、通りに向かった。先ノ岬は、ホテルの外にいた紳士風の男がケータイで何か話しはじめたのを見逃さなかった。多分、猛烈な勢いで、黒いセダンが少し傾斜しているホテルの歩道を疾走する。

「ヨウミンソ走って」

60メートルくらい後から黒いでセダンが迫った。

先ノ岬は、後のドアを開けて待った。

ヨウショウも車を見て走った。

ヨウショウとヨウミンソが後部座席に乗り込んだ３秒後に、黒いセダンが、ホテルの前の歩道を駆け抜けた。走らなかったらアウトだった。

「西単に行ってください」

ヨウショウもヨウミンソも、何も話さなかった。先ノ岬は、運転手に、官庁街に行くように言った。運転手には、何かよくわからないようだった。なぜ黒いセダンが、歩道を疾走してきたのかわからない。なぜ２人が走ってタクシーに乗り込んだのかわからない。
「私は、この近くにいるから」
先ノ岬は、そう言って、歩きはじめた。ヨウミンソとヨウショウは、建物に向かった。

「終わったから出る」
ヨウミンソから電話があった。
先ノ岬は、走って、通りに向かった。そしてタクシーを止めて乗り込んだ。
「あの建物の前に止めてくれないか」
タクシーの運転手は、１００００元札を見て、スピードを上げた。多分、ホテルの件があって、ここでは、何もしないだろうと思った。カンである。しかし、気になった。歩道が広い。
ヨウミンソとヨウショウは、人に紛れるよう出てきた。用心している。先ノ岬は、後部座席のドアを開けて待った。
何も起こらなかった。
「北京空港へ行ってください」

先ノ岬とヨウミンソとヨウショウが中山公園のヨウショウのオフィスに着いたのは、もう夜になっていた。
ヨウミンソは、ヨウショウのプライベートルームで、韓国料理を調理しはじめた。料理していないと落ち着かないと言った。襲われたのは、今日で３度目になる。
中山公園のヨウショウのオフィスは、しばらくぶりだった。
ワンスイとチャンスーは忙しそうだった。
「ヨウミンソと先ノ岬が一緒にいるのは珍しい」
ワンスーは驚いた。
「ミスリーはいないんですか？」
チャンスーは、ソウルの縄文のネットショップをオープンさせたが、５００

個しか回せないとミスリーに言われて、在庫なし表示を続けて、電話に忙しい。
「もう夜だから明日にして」
ヨウショウは、報告を聞きながら、２人に言っている。上海の先ノ岬特別チームも活気がある。
「先ノ岬、これからどうしたらいいと思っているのだ」
ヨウミンソは、韓国風ごはんを食べながら、先ノ岬に言った。ヨウショウも不安そうである。
「今回のことは、ソウルのマナティに関することだと思って間違いはない」
「ソウルのマナティを妨害したがっている」
「ソウルでの販売はもう仕方がないと諦めている」
「ソウルでヨウミンソや工場が襲われることはないだろうと思う」
「断言できないが」
「日本と中国でソウルのマナティが販売されることを妨害したがっている」
「私は、何度も隙があるのに、何もない」
「ヨウミンソを傷つければ、ソウルのマナティは止まると思っている」
「３度とも、交通事故を装っている」
「メンツのようなことは、まだない」
「メンツってなんだ」
「プロがやってないことかもしれない」
「傷つけたいのか」
「階段から転んで墜ちてもいいんだろうけど」
「どうなれば攻撃は終わるのか」
「ソウルのように発売になれば終わる」
「ヨウミンソが中国と日本への販売許可申請を取り下げても攻撃は終わるだろう」
「危なくなったら、一旦、取り下げてもいいと思っている」
ヨウショウは、黙って聞いていた。

〇ミスリーが酔い潰れて

12月になった。先ノ岬は、もう１つの顧問の難問に、頭を痛めていた。グッドアイデアがない。
ミスリーからメールである。暗号付である。
「ソウルの縄文は、ソウルで３００００個、堺に２００００個、上海に１５００個で、合計５１５００個になった。ジュソン電子のソウヨウ社長もギリギリだと言っている。ボトル生産会社の社長のハンジウンもギリギリだと言っている。これ以上やるには、抜本的なことを考えないといけない」
「ソウル工場の方は、自動車の電子回路の受注が、また少し減った」
「しかし工場の運営はラクになった」
「ソウルの縄文の貢献が大きい」
「先ノ岬特別チームの経常利益は５０００万になった」
「50名のソウルの縄文電子鍋の工場の社員を、全員、先ノ岬特別チームに移した」
「別添の現代源田ソウル工場のＢ／ＳとＰ／Ｌを三枝湊さんに送ってもいいか」
先ノ岬は、別添を読まないで返事をした。
「お願いします」
「もしもし」
「送ったばかりなのに返事が早いから読んでないんじゃないかと思うんだけど」
先ノ岬は、Ｐ／Ｌを見ていた。
「見ていますけど」
「今見てるんじゃないの？」
「ええ」
「なんで見る前に返事するわけ？」
「ミスリーのやることのすべてに味方だから」
「そういうのはヤバイな」
「盗聴されてたらまずいよな」
「わかった」

「ソウルの縄文の日本への販売価格を少し下げてもらっていいですか？」

「少しソウルの利益を川口の本社に移したいのですが」
三枝湊から電話がかかってきた。
ミスリーに電話をしたのだろうが、先ノ岬に言ってくれになったのだろう。
「ソウルの縄文の電子鍋も立ち上がろうとしているし、ソウルのマナティも立ち上がろうとしています」
「何があるかわかりません」
「ソウルの縄文は、もう計算できるから、ソウルの縄文の増産にチカラを注いでください」
「ソウルのマナティなんか、どうなるかわからないし」
「電子鍋だってリスクが大きいし」
「明日川口に伺いますので」
「11時にお願いします」
多分、ミスリーは、萎えているだろうと思った。

三枝湊と話した後、午後の便で、先ノ岬は、ソウルに飛んだ。
「ミスリー今晩ごはん食べたいから空けてくれ」
「その気になれない」
「今から出るから」
先ノ岬一葉は、松下三郎に、ソウルに行くと言って出た。
先ノ岬は、ソウルに着いてミスリーに電話をしたが、不在になっていた。ソウル工場に行ってもいないことはわかっている。
「その気になれない」
そうなのだ。ミスリーは、現実を見せられた。いくらミスリーがガンバっても、所詮は、現代源田の川口の本社に吸い上げられる。価格を調整すればよい。一気に張りつめていたものがなくなった。
先ノ岬は、「わたしのマンションのソファーでよかったらどうぞ」と言われて、マンションまで行ったが、跡をつけられていて、ホテルに移ったことがある。
かろうじて覚えていると思った。マンションの前の石畳みに座って待った。部屋は、いくつか灯りがついているが、どこだかわからない。コンビニがあった。トイレを借りて、コーヒーを買ってメロンパンを買った。ソウルに

もメロンパンがあった。
もう10回くらい電話しているが出ない。
メロンパンを食べながらコーヒーを飲んだ。このマンションは、ロビーにも入れない。
ものすごく寒い。背広で川口に行って、そのままソウルに来た。先ノ岬は、コートを着ない。持ってない。凍えるように寒い。12月に入っているソウルだ。何人もマンションに入って行った。住人だろう。怖そうに先ノ岬を見て行く。先ノ岬も、ミスリーではないかと、顔を見てしまう。おかしな雰囲気だ。
車が入ってきた。駐車場の方へ行くようだ。
ミスリーの車のよう思えた。
先ノ岬は、車の後を追った。
頭から少し斜めに駐車場に突っ込んで止まっていた。
「ミスリー」
音楽がうなっていた。何も聞こえないだろう。
「ミスリー」
エンジンが止まってうなっていた音楽も止まった。
「ミスリー」
ミスリーは、運転席から降りられないくらいに酔っていた。すごいアルコールの匂いである。よくこれで運転してここまで帰ったと思う。日本では考えられない。
とにかく車から降ろさないといけない。キーを外してポケットに入れた。肩に担ぐように車から降ろした。バックとコートを持って、ドアを締めた。
そのまま玄関までやってきた。
玄関脇に置いてあった自分のトランクも左手で持った。
「ミスリーどうやって入るのか教えてくれ」
まるで返事がない。
誰か中に入ろうとしていた。女性だった。
「ミスリーの部屋を知っているか」英語で聞いた。
彼女は、ミスリーを見て、慌てて、ドアを開けた。指紋認証のようだった。
ミスリーの部屋は４階だった。しかし部屋に入れない。彼女は、ミスリーの

指紋を認証させてドアを開けた。
「あとをお願いします」
先ノ岬は、部屋を出ようとした。
「その人はいいの」
ミスリーがつぶやいた。
彼女とミスリーは、なにやら韓国語で話していた。
そして、彼女は、自分の部屋の番号を紙に書いて、出て行った。
「何かあったら電話ください」
「どうもありがとう」
先ノ岬は、どうしたらいいかわからなかった。
「わたしシャワーしたいから連れてって」
「シャワーしたらしっかりする」
「脱ぐの手伝って」
先ノ岬は、シャワーのお湯を確かめに行った。自分もシャワーを浴びるしかないと思った。ハダカになってシャワーを確かめた。先ノ岬のマンションのシャワーより簡単だった。
ミスリーをハダカにするのに時間がかかった。
「わたしのバック持ってきた？」
バックを渡したが、そのままだった。
先ノ岬は、ミスリーを担ぐように、シャワー室に連れて行った。
「ミスリー危ないから座って」
頭からシャワーを浴びせた。

なにかの圧力を感じていた。
ミスリーが上から見ていた。
少し明るい。多分早朝だ。
ミスリーは、ずっと、小さな声を上げていた。先ノ岬に挑むかのようだった。
先ノ岬がこらえきれなくなって、ミスリーは先ノ岬にゆずった。
そのまま、ミスリーは、動かなくなった。呼吸も静かになった。

「シャワーしてきて」
ミスリーの声だった。
先ノ岬は、少し眠ったのだ。パンの焼ける匂いがしていた。卵の匂いがしていた。
ショートトランクから下着を出してシャワー室に向かった。
「この戦いは現代源田がソウル工場のようにならないと終わらないのね」
「わたしはそこまでやらないといけないのね」
「昨日のように飲んでたら身体を壊す」
「そんな話ししてない」
「わたしはどこまでやればいいのかの話ししてる」
「あなたは新しい現代源田をつくると言ってる」
「だから現代源田が先ノ岬特別チームのようにならないと終わらないの？」
「そこまでわたしはガンバルの？」
「わたしはソウルの１社員」
「わたしはソウル工場が大事」
「現代源田のことなんか知らないしどうでもいい」
「昨日のようなことがあるともうガンバレない」
「いただいていいですか？」
「ウルサイ」
「夜はメロンパン１つだった」
ミスリーは、冷蔵庫からごはんも出してきて、電子レンジで温め始めた。冷蔵庫からスープらしきものも出してガスで温めはじめた。キムチ冷蔵庫からキムチを出してきた。
「いただきます」
ミスリーは、コーヒーを飲みながら、先ノ岬が食べるのを見ていた。やはり、朝ごはんも韓国の朝ごはんがおいしい。
「私はプロだし、現代源田を新しくすることを引き受けた」
「あなたは篠田三太郎さんを社長にすることを頼まれたのではないのか」
「会社が良くならないのに社長は続けられない」
「私は、ミスリーもソウルの工場の社員全員も、現代源田の社員全員も、働くことに意欲を持てるようにしたいと思っている」

「それは先ノ岬が頼まれたことじゃないでしょ？」
「私のプロセスを見ないと社長はできない」
「社長のお手本を示しているのか」
「わたしは、ミスリーのように、ソウル工場の日常にタッチしない」
「社長の一部を示している」
「それはなんだ」
「社長が戦うものを示している」
「なんだ」
「話しをした」
「みんなの少しの解放感か」
「見えざる悪魔だ」
「社長は挑戦者をやらないといけないのか」
「他にやれる人がいない」
「私は、社長がやるべき一部、挑戦者を示しているだけだ」
「これからも三枝湊から電話もらって酒に逃げる」
「三枝湊がミスリーに電話しなくなるまでガンバルしか道はない」
「先ノ岬特別チームだけでいいかと思った」
「そしたらソウル工場もやってくれ」
「今度は現代源田もやってくれなのか」
「たまたまだけど私と出会ってしまった」
「今日話せてよかった」
「辞表を叩きつけようと思った」
「ガンバル」

〇現代版ゆりかご

「ジュソン電子のソウヨウ社長と相談した」
「日本円で１６００円でソウル工場は仕入れているが、ロットが増えると１５００円にする約束だった」
「１月から１５００円にする」
「その差額１００円は日本の現代源田に特許料を払ってないので、それに当

てることにした」
12月15日のソウルのマナティの10台の出荷の前に、ミスリーからメールがきた。先ノ岬一葉と三枝湊にあてたものだ。
「どうもありがとう。よろしくお願いします」
先ノ岬は、ＣＣを三枝湊にして、ミスリーに返事をした。三枝からも、同じようなメールがきた。
ミスリーは、頭がいい。感心する。誰も、こころが萎えないように知恵を働かせている。

「４人の方は、ヨウミンソの工場に引き取りに来てくれる」
「その場で運転の仕方を教えて引き渡す」
「６名の方はヨウミンソの社員とヨンジュとキムキンホと辛島明人の４人が、運んで説明して引き渡すことにした」
辛島明人からのメールが、すぐ来た。
みなさん、楽しみでもあり、少し不安だろうと思った。30キロしか出ない２人乗りのゆっくり走る自動車だ。多分、２台目か３台目の自動車だろう。フツウのコンセントで充電できる。１００キロ走れる。
試乗モニターなので、日誌を毎日メールで送ってもらうことにしてある。70歳の方も、メールが使える。
先ノ岬は、もう１つの顧問の会社の難問に、悪戦苦闘している。23時頃は、空腹で交感神経になっていて、グッドアイデアが出る。必死になって、パワーポイントにデザインをしていた。
辛島明人からメールがきた。
試乗モニター10名の、試乗日誌が、暗号付で、先ノ岬に送られてきた。暗号はわかっている。
誰が考えたか知らないが、日誌を書く方も楽しそうだ。日誌を見る方もドキドキして見ることになる。
10名全員が、今日１回目の試乗をしている。４名のヨウミンソの工場で引き取っていただいた方は、そのまま運転して帰っている。
30キロしか出ないことは知っているから何もない。異様なマナティのようなデザインに、道行く人が振り返ることが楽しそうだ。坂道も苦にならない。

ソウルのマナティのコンセプトどおりだ。車内はゆったりしている。前１人後１人だが、４人乗れなくはない。しかし、２人乗りになっているので違反になる。
辛島明人の最初のコメントどおり、初日は、好評だった。
０時になって、先ノ岬一葉は、身体が副交感神経になりそうになっている自分を感じていた。眠くなるのだ。手足が温かくなる。どういうわけだか、時計のように、23時50分頃になると、変わる。
ヨウミンソのメールがきた。
「３月だけは、10台の他に、チャイルドシート付きを５台発売したい」
写真が添付してあった。宛先はミスリーだった。ＣＣで先ノ岬だ。多分、ミスリーは、明日朝、ヨウミンソの工場に行くだろう。後の座席がチャイルドシートになっている。日本でも韓国でも、同じ法律になっているそうだ。
「通常に戻す時は電話してくれたらヨウミンソの社員が行って変更する」
「価格は同じ１０００万ウオンだ」
「マナティは鉄板が厚くてあかちゃんを守れる」
先ノ岬は、ヨウミンソが気づいたのではなくてヨウショウだろうと思った。中国で販売したいのだろう。現代版ゆりかごのようなものだ。
先ノ岬は、このままでは、タイヘンなことになりそうな気がしてきた。毎月10台しかつくらないが、次から次にアイデアが出て、どんどん膨らんでしまいそうである。

「しばらく」
ミスリーから電話だった。
「声聞かないようにしてるんだけど」
「ヨウミンソの工場でマナティのゆりかご見てるんだけど」
「ヨウミンソの工場の社員とあかちゃんが来てる」
「３月まで１台貸し出してモニターにする」
「もうできているのか」
「他にも何かやってる」
「しばらくソウルには行けそうもない」
「しばらくは来ないでくれ」

「顔見るとヤバくなる」

「わたしは元気だから」

「ヨウショウから１台送ってくれってきてるから送った」

ヨウショウが何を考えているのか、少しは読めるようになった。

ソウルの縄文鍋

〇クリスマス

クリスマス直前になった。

先ノ岬は、毎日ソウルのマナティの試乗日誌を読んでいた。このまま、何事もなく日が進むのだろうか。ヨウミンソが八重洲と霞が関と北京の官庁街で襲われた。今は、何も起きそうにない。安泰な日が過ぎている。ソウルのマナティも事故もなく、故障もしない。みなさん、病院に行ったり買物に行ったりしている。少し年をとると、アクセルを踏むとバンと出てしまう勢いなんか必要ない。ゆっくり時間が過ぎてくれればいい。ソウルのマナティは、こういう感覚にピッタリである。

「ソウルの縄文電子鍋で、ソウルで10人堺で10人中山公園で10名の30人で、オリジナルメニューをつくってもらった」

斎藤咲江からのメールだった。いつの間にやったのだろう。試作を30台やったことになる。

「斎藤咲江のメールが行ったと思うけど」

「いま、ソウルの縄文電子鍋の工場の写真送ったけど、終わりに近い」

「工場で試作もできるようになっている」

「ソウルで１００名堺で１００名上海で１００名を追加してやる」

「もう生産している」

「お正月にははじめてもらう、１月１日だ」

「クリスマスだけど」

ミスリーはそれだけ言って電話を切った。

先ノ岬は、パソコンのカレンダーを見た。黙って行ってこようと思った。ミスリーのマンションに晩ごはんを食べに行こうと思った。

ここのところ、先ノ岬は襲われる感じがしない。跡をつけられてはいるのかもしれないが、気配を感じない。パソコンのバックアップはしているが、気はラクになっている。先ノ岬のマンションを探っても、ソウルのマナティの極秘のモノは見当たらない。狙われるのはヨウミンソだ。しかも、日本だろ

う。
誰にも言わないで羽田に来た。しかも、背広ではない。ダウンに毛糸のスキー帽をかぶっているしジーパンだ。先ノ岬とは思えない。京急の国際線ターミナルを降りて、急ごうと思った。
ヨウミンソが向こうからやってきた。ラフな格好をしているが、ヨウミンソだ。ヨウショウはいない。先ノ岬は、いま降りたのに、慌てて京急の電車に乗った。ヨウミンソは、考え事をしているようだ。うつむき加減に早足で歩いて、先ノ岬の座席を通り越して、ホームを歩いて行った。ベルが鳴っている。ヨウミンソは、１つ蒲田寄りの車両に乗った。
これでは、今晩のソウルのイヴに間に合わない。
ヨウミンソは、蒲田で横浜に行く電車に乗り換えた。なぜタクシーではないのだろう。電車の方が安全だが。ヨウミンソは、横浜方面の電車を、ホームで待っている。品川行きの電車が発車する。先ノ岬は、電車を降りた。ホームは、通勤時間にかかりそうだったしクリスマスイヴである。混雑している。品川から電車が滑り込みそうだった。誰かがヨウミンソに寄って行った。先ノ岬は、瞬間に察した。自分が襲われた感覚である。
「ヨウミンソ」
ものすごい大声を上げた。多分、電車が入ってきた音がしたが、もっと大きな声だった。ヨウミンソは振り向いて、その男とぶつかった。
「ごめんなさい」
ヨウミンソにぶつかった男は、そう言って、急いで立ち去った。ヨウミンソも先ノ岬も、黙って見送った。もし先ノ岬が大声を出さなかったら、あの男は、ヨウミンソを、ホームから突き落としたのだろうか。
ヨウミンソは、一転、羽田行きの京急に乗った。先ノ岬も続いた。
「騙された」
「なんだ」
「ソウルのマナティを横浜で売ってみないか」
「黙って来てくれ」
「電話なのか」
「騙された」
「先ノ岬はどうしてここにいるのだ」

「ソウルに行く」
「オレは仁川に行く」
ヨウミンソも上海に行きたかったのだ。イヴなのに、横浜にやってきた。騙されて想う。ヨウミンソは、ソウルのマナティを愛している。
先ノ岬は金浦空港である。
「日本に入る時は襲われると思って入って来ないといけない」
「もう騙されない」
「早く行け」
金浦空港行きが出発まで20分を切っていた。

「マンションの前にいるんだけど」
「いま降りる」
ミスリーは、あたかも、先ノ岬がやってくることを承知しているかのような返事をした。
「寒いから入って」
「遅くにゴメン」
もう０時に近い。
「ご馳走してやってくれってメールがきた」
「ヨウミンソか」
「横浜で助けてもらった」
「お礼を言っておいてくれ」
「暗号文で送るようなメールじゃないけど」
「今日はヨウミンソはメールしてはいけない」
「また襲われたのか」
「私がソウルに来る途中だった」
「それで遅くなったのか」
「来るとは思ってなかった」
ソウルのお酒だった。少し甘っぽい。口当たりがよい。
「キムチばかり食べないでカキも食べて」
ミスリーは、どんどん皿に注いでくる。
もう１時になっていた。ミスリーは、少女のように、シャワーと戯れて、先

ノ岬の頭を洗っていた。
「明日ソウル工場には来ないでしょ？」
「隠密で来た」
安心したように、ミスリーは、唇を寄せてきた。ミスリーの唇はおいしい。
夢のような時間が過ぎた。

〇日本の正月にヨウショウから電話
日本の正月になっていた。
ヨウミンソは、メールもなく電話もない。静かにソウルにいてくれた方がメンドーがなくていい。
「12月のソウルの縄文は、ソウル３００００個上海３０００個日本２００００個合計５３０００個だった」
「ソウルの先ノ岬特別チームは経常利益で人件費を負担して３５００万だった」
「ソウル工場は連続黒字になった」
ミスリーは、先ノ岬特別チームとソウル工場のＰ／ＬとＢ／Ｓをメールしてきた。元気そうだ。
「ソウルの縄文電子鍋の生産を、予定通り２月15日からはじめる」
「中国バージョンと日本バージョンも一緒にやる予定だったが、ソフトが忙し過ぎて間に合わないので、ソウルバージョンを先にやる」
「３月15日出荷で、２００００個」
「４月は、３００００個の生産予定」
「ネット販売は６９０００ウオンでお店には３８０００ウオンで出す」
「標準原価は２００００ウオン」
「日本は４月から２００００個上海は１００００個の予定」
「４月は合計で６００００個の生産を予定している」
ものすごい数になる。大丈夫だろうか。電話をしてみた。
「１００人のモニターをはじめる」
「ネットで募集しているが、すごい数になる」
「20倍で抽選にした」

「20倍というのは２０００人ということか」
「ソウルだけでだ」
ミスリーが元気になるのもわかる。
「６９００円というのは知っているのか」
「知っている」
「斎藤咲江はしばらくソウルにいるから」
「正月だけど」
「ソウルにいるから」
「休みがないのか」
「彼女は休みたくない」
ミスリーは、さっさと電話を切ってしまう。電話が長引くと思い出す。みんな聞いている。

ソウルは忙しいのだろうが、日本の正月は、なんとなく、時間の流れが遅くなる。
「上海に来て」
ヨウショウから電話だった。ヨウミンソが上海に向かったからだ。
「ゆりかごを盗まれた」
「まだ路上では乗れないのでここの駐車場で乗っている」
「昨日の夜中に誘拐されて脅迫の電話があった」
「５０００万円用意しろ」
「ヨウミンソは５０００万円用意したのか」
「わからない」
「ヨウミンソを誘い出しているかもしれない」
電話をしながら、先ノ岬は、パソコンをバックアップしていた。ガスを確かめて水道も確かめた。電源だけだ。
「何をしているのか」
「出る用意をしている」
「早く来て」
「ヨウミンソはいまどこなんだ」
「もう仁川に向かっている」

先ノ岬は、冷静だった。これは誘拐事件である。警察沙汰にした方がいいかもしれない。ヨウミンソは、もう着いているだろうが、どうしたのだろう。もしかして、誘拐はどうでもよくて、５０００万円はどうでもよくて、狙いは、ヨウミンソかもしれない。
先ノ岬は、虹橋空港からヨウショウに電話をした。
「ヨウミンソから連絡があったのか」
「まだない」
「仁川空港に着いたら電話があるのか」
「フツウは電話がある」
「わかった」
先ノ岬は、虹橋で仁川便の到着の時刻表を見ていた。15分後に上海に到着する。多分、これに乗っているだろう。先ノ岬が先に上海に着いたのだろう。少し時間があった。先ノ岬は、トイレに行った。緊張していて、トイレにも行っていない。空港でヨウミンソが襲われたらどうしようと考えていた。
いきなり、気を失った。気を失うと思った。激痛が右の頭を襲った。尿がズボンを流れる。誰かに見つけられたらイヤだと、瞬間に思った。それっきりだった。
「通常は頭蓋骨が割れて出血多量になるのでしょうが」
「頭蓋骨にヒビが入ってはいますが」
誰が話しているのかわからないが、はっきり聞こえた。
右の頭が痛い。
目を開けようと思ったが、うまくいかないような気がした。
ヨウミンソが気になった。
「ヨウミンソはどうなったんだ」
何人かいるような気がした。目が開けられない。手を当ててみた。包帯が巻かれている。目が傷ついたのだろうか。
「オレだ、ここにいる」
ヨウミンソの声だった。
「ゆりかごはどうした」
「これからだ」
「いま何時だ」

「０時だ」
また心地よくなった。何も聞こえなくなった。多分眠ってしまった。

〇先ノ岬の頭蓋骨
空腹感だった。調子がよい。
「誰かいますか？」
「気がつきましたか？」
英語だった。
「目が傷ついたのだろうか」
「すごい空腹だけど」
英語で話した。
「先生を呼びます」
数分だったと思う。中国語で話す声がした。
「起きれますか？」
「平気だ」
英語の話せる女性の看護師らしい。
先ノ岬は、起こされて座った。
「どこも痛いところはないですか？」
右の頭が痛かったが、今は何もない。
誰かが、包帯を外している。
目にもかかっていた包帯が外れて、目が見える。にじんで見えることもない。正常のように思えた。
ミスリーが心配そうな顔をして隅にいた。
「こんなところにいたら社長が務まらない」
「10分前に来た、安心したから帰る」
そのまま車椅子に乗せられた。内出血を調べると言ったのだろう。中国語なのでよくわからない。
部屋に帰ると、同じ姿勢で、ミスリーが、部屋の隅にいた。
「詳しく診断しないといけないが内出血はしていないようだ」
「あなたの頭蓋骨は石よりも固い」

「どんなもので殴られたのか」
「多分拳銃のグリップのようなものだ」
「しばらくゆっくりしてくれ」
そう言って、医者と看護師は出ていった。
「わたしもうソウルに帰る」
「わたし慌ててブラジャーしてこなかった」
いきなりミスリーはジャケットのまま下から持ちあげた。
「カッコいい」
「元気そうね」
「そうだ」
ミスリーは黙って出て行った。

先ノ岬は、はじめて、どうなっているのか考える時間ができた。油断していた。ヨウミンソが襲われるものだと思い込んでいた。まさか、自分が襲われるとは思ってもみなかった。先ノ岬を殺そうとしたのだろうか。そしたら、油断していたのだ、ナイフを使えば簡単だった。拳銃のグリップだったら、弾を発射すればよかった。確実に殺せた。誰か、トイレにいたのだろうか。
「わたしは元気になった」
「ヨウミンソはゆりかごを取り返したのか」
「ゆりかごは今日の朝表に置いてあった」
「ヨウミンソはどうしたのだ」
「ソウルに帰った」
ヨウショウも、よくわからないようだ。
先ノ岬を上海まで呼び出して殺そうとしたかのように思える。先ノ岬は、今回は、１度も狙われたことがない。安心していた。先ノ岬を狙うのだったら、わざわざ上海にまで呼び出さなくても、いくらでもチャンスがあるはずだ。
何がどうなっているのかよくわからない。
何日目の夕方か、よくわからない。ヨウショウが弁当を持ってきてくれた。自分でつくったのだと言った。
「私の頭蓋骨の話しはどこまで知っているのか」

「ヨウミンソとミスリーとわたしだ」
「３人だけなのか」
「現代源田にも言っていない」
病院の食事もあって、ヨウショウも一緒に食べた。おにぎりのようにしているチャーハンがおいしかった。エビがおいしかった。
「食べることはフツウになったんだ」
「さっきいつ退院できるか聞いてきた」
「１週間だと言っていた」
「私は明日退院する」
ヨウショウは、病院の食事も食べていた。
「ヨウミンソは何をしているんだ」
「１月の10名のソウルのマナティをつくっている」
「もう決まったのか」
「決まっている」
「１月15日に10台出すそうだ」
「上海でも早くやりたい」
「ゆりかごはどうなんだ」
「ソウルでは試乗レーンを走っている」
「明日退院するけど中山公園へは寄らないから」
「わかった」

○１月のソウルのマナティ**10**台

先ノ岬は、注意をして国分寺のマンションに帰ってきた。誰にも言わなかったが、虹橋空港で襲われた時、パソコンがなくなった。ひょっとすると、パソコンが欲しかったのではないかと思える。ソウルのヨウミンソの部屋に侵入されて以来、ヨウミンソのガードが固くなった。先ノ岬の国分寺のマンションも侵入されて、カギを２重にして、ガードを固くした。先ノ岬の携帯用のパソコンは、狙いやすかったのかもしれない。ソウルのマナティの最新状況を知られてしまった。
バックアップもしていた。最新の状況だった。入院している間に、パソコン

のメールの状況もわからなくなっていた。
意外なことに、パソコンのメールに、迷惑メール以外に特別なものは入っていなかった。
「ソウルのマナティの10台の状況を聞きたいので連絡をください」
「明日朝伺います」
「９時30分に待っています」
篠田由美子からの電話だった。
ミスリーに頼んだ。
「どこから電話してるのか」
「国分寺だ」
「12月の10人の状況を聞きたい」
「昨日までのをメールする」
自宅だったら、どうして退院したのか、しつこく聞くだろう。ミスリーがソウルから上海に行ったことも、誰も知らないだろう。先ノ岬は、用事だけ言うと、すぐにケータイを切った。

「松下さんおはようございます」
「今日は何事ですか？」
「奥様に電話をいただきました」
松下三郎は、先ノ岬一葉が川口に来ることを知らなかった。
三枝湊は、名古屋の自動車会社に出張だった。営業本部長だ。
「ソウルのマナティの10台に事故はないのですか？」
「10台買っていただいたのですか？」
「このままやっていけますか？」
「上海の状況はどうなっていますか？」
「日本の審査の状況はどうですか？」
篠田由美子には、ソウルのマナティで、知りたいことがたくさんあったようだ。
篠田由美子は、ソウルのマナティについて、何も知らなかった。昨日まで、先ノ岬が、上海の病院に入院していたことも知らないようだ。先ノ岬は、現代源田と、今回の、ソウルのマナティ妨害工作の関係を読みたかった。多

分、何も関係がないだろう。ホントは、現代源田ブランドの自動車が、２人乗りで特殊な自動車だとはいえ、大手の自動車メーカーの電子コントロール部品をつくっている現代源田から発売されることは、好ましくはない。そう考えている現代源田の社員も多いはずである。現代源田の社内から、ソウルのマナティの妨害工作があっても、不思議ではない。しかし、雰囲気だけだが、違うような気がする。今回のソウルのマナティの妨害工作は、誰がやっているのだろうか。見当もつかない。
「日本で承認されれば日本でも売るのですか？」
「上海でも売るのですか？」
篠田由美子の顔は、次第に不安になる。
「日本の自動車の会社が現代源田の部品を買ってくれなくなりますか？」
「心配です」
「このまま何もしなかったらどうなりますか？」
「みんな内製化するからいずれなくなるけど」
「同じじゃないですか」
「それはそうだけど」
人は、みな同じ判断をする。昨日やってきたことを、今日はもっと上手にやりたい。そうすることで、前進したと思いたい。誰もがそう思う。たらいと洗濯板での洗濯が上手になってきたと喜んでも、洗濯機が出現して、その喜びも泡となってしまう。
それが人の考えることだ。
自動車の電子部品にはノウハウがある。もっと上手にやりたい。売上を増やしたい。しかし、自動車会社の電子コントロールの内製化を防ぐことはできない。
「このままほっておくと、現代源田はなくなりますよ？」
「あなたに言われたくない」
篠田由美子は、ムッとして言った。

「ソウルのマナティの１月の10台のことでソウルに行ってきます」
先ノ岬は、松下三郎に電話をした。羽田から電話をした。ソウルのマナティは、現代源田ブランドになっている。事故があったらタイヘンである。自分

で様子を見ておこうと思った。もし、日本での販売許可を妨害するのであれば、ヨウミンソや先ノ岬を襲うだけではなくて、ソウルで販売している月10台に、事故を誘っても、可能である。
「毎日メールで10名とは連絡をとっています」
辛島明人は、現在の状況を先ノ岬に説明した。
「故意にいろいろあっても困りますから」
辛島明人は、よくわかっている。
「私の研究室も用意していただいているので、マナティの次の自動車も考えています」
「まだこれといってアイデアはありませんが」
辛島明人と斎藤咲江は、すっかりソウルの人になったようだ。堺の先ノ岬特別チームは、日本での、ソウルの縄文の販売チームになっている。
「お昼用意しているから12時になったら来てくれ」
ヨウミンソから電話があった。
ヨウミンソは不思議なオトコだ。調理をするとリラックスできるのではないかと思う。確かに、韓国料理は、食べることに手間はかからない。キムチのように、つくって保存するのに時間がかかる。
「この10名が１月の10名だけど」
「今日は、最初の１人に納品に行くけど一緒に行くか」
「ヨウミンソが自分で行くのか」
「一緒に行くだけだ」
ヨウミンソのごはんはおいしい。ゆっくり食べたいごはんだ。お酒も欲しいごはんだ。
「出かけるからお酒はない」
自分で残念そうに言う。

ヨウミンソから南へ30分くらい走って、小さな町のマンションだった。どうしてこんな土地が余っているところに高層マンションを建てるのだろうと思ってしまう。
マンションの駐車場に入っていくと、ソウルのマナティを買ってくれた60歳くらいの男性が待っていた。今回の１月出荷10名を担当する、ヨウミンソの

会社の社員が、ヨウミンソと先ノ岬一葉も紹介した。車を説明するのに30分はかかってしまう。ソウルのマナティは、特別な車である。その間、先ノ岬とヨウミンソは、車の中で、話し込んでいた。
「日本から３回目の説明に来るように言われると思う」
「ソウルでの試乗販売の状況を聞きたがっている」
「北京でも同じだ」
「ソウルでの妨害はないのか」
「今のところ見当たらないが気をつけている」
「ヨウミンソが何度も襲われるくらいだからソウルのマナティもジャマされるかもしれない」
「まだ何もない」
「気にして何もしなかったら向こうの思う壺だ」

〇交通事故

「すぐに来てください交通事故です」
先ノ岬がソウルから帰って３日しか経っていなかった。
「先ノ岬さんがヨウミンソと一緒に行ったお客さんです」
「ヨウミンソは事故の現場に行きました」
先ノ岬は、辛島明人と電話をしながら、パソコンのバックアップをしていた。10分はかかる。ガスの元栓を締めた。

入院していたが元気だった。
「乗用車が寄ってきてハンドル切り損ねた」
ガードレールにぶつけたらしい。ソウルのマナティはスピードが出ない。
「もう少し遅かったら川に転落していた」
辛島明人は、熱心にメモをとっていた。
多分、川に転落させるつもりだっただろうと、先ノ岬は思った。ヨウミンソは、事故車を見に警察に行っていた。
12メートルくらい先が川になっていた。ガードレールの切れ目に入ったら川の中だった。

多分、これだと新聞記事にはなりにくい。
辛島明人は、現場をカメラに収めていた。
「こっちに来てみないか」
ヨウミンソから電話があった。ヨウミンソは、車が気になっていた。
事故車をこれだけ見せてくれるのだから、懇意にしているのだろう。
「右前方が壊れているが思ったほどではなかった」
「運転席には何も及ばなかっただろう」
辛島明人は、事故車をカメラに収めていた。
「もう３時だがお昼は食べたのか」
「まだだ」
「帰って食べよう」
最近のヨウミンソは、外食をしなくなった。先ノ岬と一緒にいる時は、特にである。

「田舎の道だからどうだったのか誰にもわからない」
「印象としては川に落とされそうだった」
「今のところ出荷したソウルのマナティは完璧に把握している」
「誰かに持ち去られて分解された形跡もない」
「上海でのゆりかごはよく帰ってきたと思う」
「あれは私のパソコンを狙ったものだと思う」
ヨウミンソは、先ノ岬が言ったことに驚きの表情をした。
「いくつかのグループがいろいろなことを頼まれている可能性がある」
「頼んでいる人物は表に出ない」
「先ノ岬のパソコンはどうしても欲しいな」
「ソウルのマナティの最新の状況を掴まれたことは間違いない」
「ソウルのマナティが自分で勝手に事故を起こすことは考えられなくなったのだろう」
「それほど車はしっかりしているし運転もしやすい」
「今後も事故を誘発させようとするのか」
「この工場の警備をしっかりしておいてくれ」
「ビル工場はこういう時に便利だ」

確かに、ビルの中の工場だから、侵入しにくい。
「どこにいるのか」
ミスリーから電話がかかってきた。ミスリーにはまだ会ってない。
「12月に納品したお客さんからだけどスーパーマーケットの駐車場でソウルのマナティが盗まれたらしい」
「ソウルの街中だ」
ヨウミンソは、ガスを止めて電気を消していた。自動扉にしてあった。
多分、ヨウミンソと先ノ岬を、どこからか見ているだろうと思った。やはり、どうしても１台欲しいだろう。分解したいと、誰でもが思う。
「キーはあるが車がない」
「ここはカメラの死角になっている」
「どうやってソウルのマナティを運んだのだ」
「キーをコピーしたと思う」
「キーはどこに置いてありますか？」
「玄関だ」
辛島明人は、ヨウミンソと相談していた。そして、明日１台届ける約束をしていた。
「キーを盗まれないようにしてください」
ヨウミンソの部屋に帰った時、先ノ岬もヨウミンソも、元気がなかった。この先何が起こるのか、予想がつかない。
夕暮れになっていた。
「マッコリでも飲むか」
ヨウミンソは、酒を出してきた。今日は、もう事故があっても辛島明人に任せようと思ったのだろう。
「明らかに誰かが仕組んでる」
「ヨウミンソを傷つければ終わると思ったんだろうけど」
「オレは傷つかない」
「いまは、ソウルのマナティを傷つけている」
「巧妙だ、誰にもわからない」
酒を飲んでいるのだが、酔った気がしない。
「晩めしをつくろう」

ヨウミンソは、晩ごはんをつくりはじめた。調理をしている時が、頭がクリアーになるのだろう。
先ノ岬は、ミスリーに電話するかどうか迷っていた。
「ヨウミンソと話しあるでしょ？」
「ヨウミンソのごはんもおいしいから」
「明日の朝早く国分寺に帰る」
「内緒で来てるのね」
「そうだ」
「わかった」
メールしてみた。多分、ソウルの縄文鍋のことで忙しいだろう。
「ミスリーはいいのか」
「せっかく内緒で来てるのに・・・・」
ミスリーの追伸が気にかかる。
「明日朝早く帰るから泊めてくれ」
「ゆっくりしてくれ」
ヨウミンソは、また何かをつくりはじめた。

〇ソウルの縄文鍋工場完成
２月５日に、ミスリーが川口に報告に行った。１月のソウル工場の報告である。先ノ岬特別チームの報告もである。
「先ノ岬さんは来ないのですか？」
篠田由美子は、ミスリーに聞いた。
「今日報告に伺うという連絡は差し上げましたが、横浜で用事があるとおっしゃっていました」
「事前に報告はさせていただいています」
「本社が良くないからミスリーが儲けたお金を吸い上げようとしているでしょ？」
ミスリーは、率直な篠田由美子に驚いた。12月の上旬には、ソウルの縄文の日本への販売価格を変えるように要求されて酔い潰れていた。
「負けないでガンバって」

ミスリーは、緊張して川口に来ていた。また三枝湊に、何かを要求されるのではないかと疑っていた。三枝湊は、何も言わなかった。ミスリーが一時持っていた、現代源田への不信感は、少し消えていた。
「わたし忙しいから帰る」
先ノ岬は、国分寺のマンションにいた。横浜などに用事はなかった。ミスリーと一緒に、川口に行かない方がいいのだと思った。
「わかった」
ミスリーは、先ノ岬の国分寺のマンションに来たことがなかった。
「堺には寄らないのか」
「またすぐ来る」
「ソウルの縄文鍋の工場が完成しそうなので用事が多い」
「来週の月曜日に簡単だけどパーティをやるから来てくれ」
「わかった」
今は、現代源田から、先ノ岬を見張っている男はいないと思う。ミスリーの跡をつける男もいないだろう。しかし、ソウルのマナティを妨害する誰かが、危険である。ミスリーとの話しも、短い会話にしている。

「ソウルの縄文電子鍋の工場が完成したので出かけてきます」
先ノ岬一葉は、松下三郎に羽田から電話をした。電話をしながら、イヤな感じを抱いていた。国分寺のマンションを出る時からずっとである。羽田ー金浦空港便は空いていた。自分を追っている男も金浦空港に行くのだろうと思った。誰かが跡をつけている。先ノ岬のカンだが、間違ったことがない。虹橋空港の時は、完全に手抜かっていた。ヨウミンソのことばかり気になっていた。まさか、自分のパソコンが狙いであったとは、思ってもみなかった。今日も、パソコンを持っている。しかし、このパソコンを狙っても意味はないだろう。
「ミスリー、金浦空港に来なくていい」
「忙しいから行くつもりはない」
愛は、人が動く押しボタンだ。ミスリーの先ノ岬への特別な感情を読まれたくない。ミスリーが狙われると困る。弱くなる。
タクシーが１台追ってきている。

「後のタクシーが気になりますか？」
流ちょうそうな日本語で、運転手が聞いた。先ノ岬が、何度も振り向いているからだろう。
「横道に入りますか？」
「そのままでいいです」
先ノ岬の行き先は２つしかない。現代源田のソウル工場かヨウミンソの２輪車工場だ。今日、先ノ岬を追っているのは、何かわからない。
「先ノ岬さんの午後の予定はどうなっていますか？」
斎藤咲江からの電話だった。
「キムキンホとスーパーマーケットに商談に行くんだけど」
「空いています」
「一緒に行っていただいていいですか？」
先ノ岬は、今日の予定がわからなかった。パーティは夜なのだろうか。昼からは商談に一緒に行く約束をした。
先ノ岬がソウル工場に到着したのは、11時だった。ソウルの縄文鍋の50人の工場の関係者と、ソウル工場のスタッフ全員が、会議室に集まった。自動車の電子コントロール部品工場は、そのまま稼働している。
ミスリーは、２６０名の社員全員で、お昼を会議室で食べようとしていた。その前の30分を、ミスリーの話しや、ソウルの縄文電子鍋の工場の責任者のハンジョンの話しを予定していた。
みんな、若いミスリーの話を熱心に聞いていた。ハンジョンの話しもおもしろかった。
ミスリーは、２６０名の全員でお昼を食べる時も、ソウル工場の全員に、ソウルの縄文電子鍋の今後の生産予定などを話した。最高級だろうと思われる弁当だった。パーティーだとミスリーが言ったのは、これだった。縄文電子鍋の生産工程が、ビデオで流された。ミスリーがナレーションをしていた。多分、この撮影もミスリーがやったのだろう。
みんな弁当を食べながら、縄文電子鍋の出来上がる様を観ていた。
ミスリーは若い。しかし、キャプテンシーがある。先ノ岬の出る幕がないと思った。ミスリーが、先ノ岬にＳＯＳを求めてきたことなど、うんと昔のようである。

まだお弁当の片づけも終わらない時に、斎藤咲江から電話がきた。
「玄関で待っていますが出られますか？」
先ノ岬は、慌てて玄関へ向かった。ミスリーは、社員と話している。「先ノ岬さんはソウルに来ているのですか？」
「今なにをしていますか？」
「明洞のヨウミンソの２輪車のショールームにソウルのマナティを展示しています」
ヨンジュからの電話だった。
「今日行きます」
返事をしておいて、キムキンホに場所を聞いた。
「ソウルの縄文電子鍋の相談が終わったら寄りましょう」

先ノ岬が一緒に行くことで、スーパーマーケットの社長も商談に出席してくれていた。ちょっとしたプレゼンテーションになった。斎藤咲江は、用意していた食材を電子鍋で調理しはじめた。
社長は、これだったら自分で調理できそうだと言って、斎藤咲江に、しきりに質問していた。調理の種類をインプットすることがミソだ。細かい電子回路が組み込んである。自動で調理する。
先ノ岬も、はじめて、ソウルの縄文電子鍋で調理した鍋を食べた。斎藤咲江が準備したものだからかもしれない。おいしかった。
まだ若い女性のバイヤーは、上司と話しこんでいた。そして社長に何事か言った。
「承知しました」
「ソウルの縄文と同じようにソウルの縄文電子鍋を販売させていただきます」
「価格は相談してください」
明洞のソウルのマナティを展示してあるヨウミンソのショールームまで、歩いても行ける距離だった。
フツウのビルの一角の店舗である。
キムキンホが案内してくれた。斎藤咲江もはじめてだと言った。
「昨日から展示しはじめている」

黄金のソウルのマナティが展示されてあった。大型の画面が、黄金のソウルのマナティが走っている姿を映していた。確かに、疾走している姿ではない。ヨウミンソの２輪車のように、疾走するカッコ良さではない。水の中を静かに泳ぐマナティである。
しかし、何かしら、ホッとするのである。若者たちも立ち止まって見ている。
「何だろうこれは」
ヨンジュがやってきた。午前中に１時間と午後に１時間、このショールームにいるんだと言った。ヨンジュはモデルのようにカッコいい。
昨日も、１台売れたらしい。月に10台しか販売しないのに、このショールームで毎日１台は売れるのかもしれない。しかも、ネット通販の販売の方が、反応が大きい。
「２月の10台はどうしているのですか？」
「１月１日から１週間で販売した」
「現在は３月の10台の販売をしている」
「４月の10台は３月１日からしか販売しない」
明洞は若者の街である。ソウルのマナティは、若者の車ではない。しかし、若者に人気があるそうだ。お金のある若者が、両親に買いたいと思うのだそうだ。

○先ノ岬一葉が刺された

先ノ岬は、油断していた。11時からの２６０人で弁当を食べる時間から、警戒感が薄れていた。ヨンジュと別れてビルから歩道に出たところで、誰かにぶつかった。一瞬痛いと思った。気を失うかもしれないと感じた。
「キムキンホ大きな病院に運んでくれ」
斎藤咲江もキムキンホも、何が起こったのか、わからなかった。先ノ岬の左脇下から大量に流れて来た血に驚いた。キムキンホは、先ノ岬を抱えるように、車に運んだ。車が、みるみる血に染まった。動脈が傷ついている。薄れる意識の中で、先ノ岬は冷静だった。
病院まで２分15秒だった。大量に流れる血は止めようがなかった。

先ノ岬は、どれくらいの時間が経過しているのか、よくわからなかった。誰の声もしない。なぜソウルで襲われたのか、考えなければならなかった。これは明らかに、ソウルのマナティのことだ。明洞のヨウミンソのショールームに行かなければ、多分、起こらなかった事件だろう。警戒心が薄れていた。虹橋空港のトイレで襲われた時は、先ノ岬のパソコンを奪うことが目的だった。先ノ岬を殺そうとは思っていなかっただろう。ピストルの台座で殴られた。トイレの途中だった。恥ずかしかった。しかし、今度は、先ノ岬を殺すつもりだったと思う。ものすごい鋭利な刃物で一瞬の出来事だ。先ノ岬がいなくなっても、ソウルのマナティがいなくなるわけではない。よくわかっているはずである。なぜだろう。よくわからない。ターゲットを、ヨウミンソから先ノ岬に移したのはなぜだろう。あれだけ大量の出血をしていた。寒くなるだろが、意外に温かい。身体が温かい。頭もクリアーだ。多分、左脇を刺されたがどうなったのだろう。痛くはない。目は正常に見える。空腹感がある。これは、警察が動いているだろうが、どうなっているのだろう。

先ノ岬一葉が、空腹だと言って看護師を呼んで、医者がやってきて、何やら韓国語で話していた。そして、最初にやってきたのは、篠田由美子だった。
「よっぽどお金持に見えたのね」
篠田由美子は、おかしなことを言った。
「腹がへって死にそうだ」
いきなり、篠田由美子は、笑いはじめた。安堵の笑いであることは、間違いないと思った。
退院したらわたしのごはん食べましょう。最初に電話してください。
「わかりました」
「わたし川口に帰る」
「申し訳ありません」
先ノ岬は、明洞で刺されたことが、どのようになっているのか、よくわかっていない。曖昧な返事をしておかないといけない。ヨウミンソかミスリーと話すまで安心できない。
「警察の方です」

「５分の約束です」
看護師が英語で伝えた。
「犯人の顔を見たのか」
「一瞬でたくさんの人がいて誰かにぶつかったことしか覚えていない」
写真を何枚か見せられたが、全くわからない。
「いつも左のポケットに財布を入れておくのか」
「右だ」
「左にケータイとパンフレットが入っていたと思うが」
「左に財布があると勘違いした」
先ノ岬は、少し、飲み込めた。篠田由美子が、金持ちに見えたと言ったことも、つながった。先ノ岬の左内ポケットの財布を、一瞬に切り取って、一瞬に持ち去ろうとした。何かの拍子に、深く入ってしまったのだろうと思われている。
「私のケータイはどこにありますか？」
「使えるから心配しなくていい」
すぐに５分たった。
看護師にうながされるようにして、刑事は、部屋から出て行った。先ノ岬は、少しづつ、様子がわかってきた。先ノ岬が、明洞で刺されたことが、どのように扱われているか、わかってきた。先ノ岬は、目をつぶって考えていた。
「気分が良くないのか」
「腹がへった」
看護師が笑った。
「病院に来て何時間になるのか」
「32時間になる」
「今は何時だ」
「０時だ」
「腹がへった」
「先生が考えている」
「ガマンするのか」
「栄養的には問題はない」

目が覚めた時、窓のある部屋にいた。朝である。
医者がやってきて、どういう手術をしたのか、説明をしてくれた。
「動脈が傷ついたが、縫い合わせた」
「激しく動かない方がよい」
「トイレには自分で行けないのか」
「恥ずかしい」
医者は、笑って、車のついた杖のようなものを持ってこさせた。
「ここに頼って歩いてください」
「決して自分のチカラで歩かないように」
「ごはんが食べたい」
「今日の朝から用意させます」
「あなたのような人は珍しい」
先ノ岬は、多分元気だが、縫い合わせた動脈が切れたらどうにもならない。しばらく、医者の言うとおりにしないといけないと思った。それにしても、ミスリーもヨウミンソも来ない。気になる。
「電話はできないのか」
先ノ岬の2台のケータイと財布とポケットの中のものと、ショートトランクが運ばれてきた。着るモノは何もない。靴もない。グチャグチャだろう。

「目が覚めて朝ごはんを食べた」
「わかっている」
ミスリーは、そっけなかった。忙しくて電話をしておれないという雰囲気だった。ヨウミンソの電話はつながらなかった。留守になっていた。
「朝ごはんを食べた」
それだけ入れておいた。
「下着は今日からこれにして」
「歯みがきはこれ」
「退院する時はこの背広にして」
「靴は黒にした」
「ネクタイは少し高かった」

「コートは着ないから買わなかった」
ミスリーは、入ってくるなり、自分の持ってきたものを説明した。
「今度はダメかと思った」
ミスリーは、財布を狙ったナイフが深く入ったなどとは思わない。
「どうすればいいの？」
「これは戦いだから勝つしかない」
「どうなったら勝ったことになるの？」
「多分、日本でソウルのマナティが発売されることだろう」
「だろうなの？」
「そうだ」
「他に方法は？」
「私とヨウミンソが諦めてイタリアに移住すれば終わる」
「わたしは？」
「単なる現代源田のソウル工場の社長をしててくれ」
「わたしが狙われるとメンドーなのね」
「そうだ」
ミスリーは、出口の暗がりで、先ノ岬に唇を投げた。
その夜も、ヨウミンソは現れなかった。
電話もない。気になっていた。
夜遅くなって、ヨンジュがやってきた。
「ヨウミンソから頼まれた」
「２月の10台を仕上げている」
「おにぎりとキムチだった」
「ヨウミンソは元気なのか」
「工場に行ったけど元気だった」
「わたしもおにぎり食べたいけど」
ヨンジュは、温かいお茶を用意していた。
「内緒でしょ？」
「ヨウミンソがつくったのか」
「そうだ」
先ノ岬も、このうえヨウミンソが襲われてはたまらない。ここに来てほしく

はない。
「ヨンジュ送って行けないけど気をつけて」
「平気だ彼が下で待ってる」
「よろしく伝えてくれ」
「わかった」

〇温泉宿
「ソウルの縄文電子鍋の生産を開始した」
「予定通り３月に出荷する」
「品質管理をラインに組み込んだ」
ミスリーは、先ノ岬に知らせないといけないことを勝手にどんどんしゃべる。
「わかった」
多分、動脈が傷ついている。なかなか退院させてもらえなかった。動脈でなかったら、先ノ岬は勝手に国分寺に帰っただろう。今回は、慎重にしている。それもあるが、ここにいることが、先ノ岬にとって、安全でもある。警察の事件の捜査も、進行していないようだ。情報がゼンゼンない。確かにそうだ。
先ノ岬は、ヒマだった。どうにもならない。パソコンが手元にあることがなんとか救いになっている。現代源田の他の、もう１つの顧問の会社の難問を考えることが多くなっている。病院のベッドで考えている。時々は、車いすに乗って屋上に出ている。実は、病院は、勝手にいろいろな人が入ってくる。決して安全ではないことが、次第にわかってきて、心配にもなる。夜なども、勝手に入られたら、防ぎようがないのではないかと思ってしまう。かえって、防備を固めた国分寺のマンションの方が安全ではないか。ヨウミンソの工場の方がもっと安全である。しかし、どういうわけだか、先ノ岬が、病院で襲われる感じがしない。カンである。多分、病院では、事故を装うことが難しいからだろうと思える。どうあっても、事故にしてしまいたいのだろう。
日曜の早朝だった。

「この前持って行ったバックにパンツとセーターが入ってるから」
「正面出て左の路地に車止めてあるから」
「走らないで歩いてきて」
ミスリーは、思ってもみない動きをする。誰も予想しないだろう。
どこも痛くはない。走らないで歩いて車に乗った。
「わたしのマンションも監視されてたらいけないから」
ミスリーは、高速道路を飛ばした。後には誰もいない。
「どこに行くんだ」
「着いたらわかる」
「ソウルの縄文電子鍋の生産をはじめる」
「生産ラインになっているのを動かす」
「みんな緊張している」
「なんか気をつけることはあるのか」
「ハンジョンはどうしてるのか」
「毎日鍋でお昼を食べている」
「モニターしているのか」
「韓国にはいろんな鍋があるから」
ミスリーは、生産ラインがうまく稼働するかどうか気になっていた。そして、ソウルの縄文電子鍋が、キチンと調理できることだ。買っていただけることだ。
「先ノ岬は殺されそうになったのは何度目なのか」
「わたしが見ている先ノ岬はいつも殺されそうになっている」
「もう１つの顧問の仕事では殺されそうにはならない」
「難問は抱えているが」
「なぜだ」
「見えざる悪魔と戦わないからだ」
「見えざる悪魔は誰にでもどこの集団にもいると言ってたけど」
「見えざる悪魔と戦わないと私が頼まれていることがうまくいかない場合が多い」
「見えざる悪魔は先ノ岬を殺すのか」
「人ではない見えざる悪魔だ」

「挑戦者だからか」
「見えざる悪魔は挑戦者が苦手だ」
「挑戦者は見えざる悪魔をやっつけようとするのか」
「そうだ」
「先ノ岬は現代源田の見えざる悪魔と戦っているのか」
「そう思っていたが今は違う」
「ソウルのマナティを日本で販売させたくない悪魔だと思っている」
「思っているとはなんだ」
「自分にもよくわからない」
「先ノ岬やヨウミンソを殺そうとしている見えざる悪魔がわからないのか」
「そうだ」
「命がいくつあっても足りない」
「ヨウミンソも何度も危なかったけどどうしてだ」
「あなたから離れたらヨウミンソは安全だ」
「ヨウミンソは先ノ岬を愛しているのか」
「ミスリーには理解できないかもしれない」
「時々ヨウミンソが悔しくなる」
「私の弱みはミスリーだけど今度の見えざる悪魔は、そのことをまだ知らない」
「知られたらミスリーが危険になる」
山の奥に入って山道をしばらく走った。
舗装されてはいないが道があるのだから誰かが住んでいるのだろう。森があるわけではない。低い樹に覆われた家がふいに見えた。
「夕方までここでゆっくりするから」
ここが何であるのかよくわからない。裏に出るとキレイな川が流れていた。
湯気が出ている。ここは温泉かもしれないと思った。
ロッジのような別棟の部屋だった。部屋に風呂があった。
日曜だし家族連れもいた。山奥の温泉宿なのだろう。
ミスリーは、案内してくれた女性に、韓国語でなにやら話しをしていた。お金を渡していた。
「先ノ岬は温泉に入れるのか」

「風呂に入っている」
「まず温泉に入ろう」
露天風呂だった。
ミスリーは笑った。
「こっちは元気なんだ」
「縫い合わせたわけじゃないから」
「どうなってるか見せて」
ミスリーは、左脇下の縫い合わせた傷を見ていた。
「よく心臓にいかなかった」
「この下の傷は昔に刺された傷なの？」
「そうだ」
「何年前？」
「７年になる」
「他に傷はないの？」
「ない」
「自動車に飛ばされたけど」
「傷はどこにもない」
「ミスリーは傷はないのか」
「探してみて」
ミスリーの身体はキレイだった。白い肌をしていて、傷があったら目立つだろうと思う。
「酔い潰れてガードレールにぶつけた傷はないのか」
「探してみて」
ミスリーは、ガマンできなくなって、ベッドへ向かった。
「ここで一緒に刺してほしい」
ながい時間だった。
お昼が運ばれてきたらしい。
ミスリーは、ごはんはどうでもいいという感じで、シーツに伏せていた。窓からの光が真っ白なミスリーの背中を照らしていた。
ミスリーのケータイが鳴っていたが、ミスリーは起きなかった。
まだ冷たい外気を浴びて、こういう時間のタバコはおいしかった。なつかし

い。タバコを止めたのだが、こういう時間は残念である。
「外は寒いのね」
いつの間にか、ミスリーがお茶を煎れていた。

ミスリーは、少し人通りのある道まで来て、韓国語でどこかへ電話していた。
「あそこの看板の下にタクシーが来たら行って」
「病院まで連れて行ってくれる」
「わたしは今日はいままでの人生で最高の日だった」
「だけどあなたは明日また刺されるかもしれない」
「覚悟しないといけない」

○ソウルの縄文電子鍋生産開始
「生産を開始して３日目になる」
「今のところ手直しもない」
「今日見に行く」
「タクシーで行くから誰もよこさないでいい」
「わかった」
「今日工場に出かけてきます」
看護師にも大きな声で言った。
「もう退院してもいいと思うけど」
「先生に相談します」
「３時間にしてください」
「日曜のようだとわたしが叱られます」
先ノ岬は、ミスリーが用意したワイシャツやネクタイをして背広を着た。
玄関で待っていてくれたタクシーに乗り込んだ。
多分、誰も追ってはこないと思った。なぜか、今日は、ソウルの縄文のことで出かけるからだ。病院から出かける。もし追うとすると、帰りだろう。
先ノ岬は、今日は、試している。どこかで誰かが、今日の先ノ岬は、ソウルの縄文のことで、現代源田のソウル工場に行くことを知っている。タクシー

の跡を追うこともない。
日曜は、早朝に、誰にも言わずに病院を出た。先ノ岬の空白の時間になっただろう。もし見つかれば、ミスリーが危ない。
先ノ岬は、流れ作業で流れているソウルの縄文電子鍋を見ていた。工場の中には、人がいない。ほとんど自動で流れている。先ノ岬は、感心してハンジョンの説明を聞いていた。
「お弁当つくってきてるから」
ミスリーからのケータイメールだった。
「ハンジョンの話しをもっと聞いていたいけど３時間以内に戻らないと退院させてもらえない」
ハンジョンは、慌てて話しを止めた。ハンジョンの話しを感心して聞いてくれる。ハンジョンは、もっと話していたかった。しかし、今日は３時間しかない。
先ノ岬は、キムキンホにも話しを聞きたかった。
「注文はもらっている」
「３月15日２００００個出荷はできる」
「４月は３００００個の生産予定だ」
「４月は日本に２００００個と上海に１００００個の予定だ」
「これ以上の販売活動はできない」
先ノ岬は、安心した。慌てて工場増設などの話しになっていないからだ。
「日本の鍋のコントロール回路を修正している」
「韓国鍋と日本の鍋はゼンゼン違う」
「中国も違うのか」
外見は同じだが、中のコントロール回路が、全く違っているのだと、斎藤咲江が言った。斎藤咲江は、ソウルの人のようだった。
「お昼から自動車会社に出かける」
ミスリーの部屋で、ミスリーの弁当を食べていた。ミスリーは、近所で１コインの弁当を買ってきて食べていた。
「今日は平気なのか」
「今日は狙われない」
「なぜだ」

「ソウルの縄文のことで出かけているから」
「私やヨウミンソへの警告だから」
「ソウルのマナティから手を引け」
「中国での販売許可があるかもしれない」
「どうしてミスリーが知っているんだ」
「ヨウショウから電話があった」
「中国でも大量販売しなくて月に10台でしかも試乗販売だ」
「北京から聞きに来たらしい」
「安心して帰ったって言っていた」

先ノ岬は、帰りのタクシーがつけられているのを知っていた。思い切って、明洞に向かった。
「買物をしますから、ここで15分待っていてください」
先ノ岬は、１００００ウオンを渡した。
「病院に行くのか」
「買物するだけだ」
先ノ岬は、雑踏に入って行った。多分、危ないと思った。注意深く、ヨウミンソの２輪車のショールームに向かった。ヨンジュが驚いて先ノ岬を店内に入れて、自分を通路側にした。
「午前と午後の１時間づつしかいないけど関心のある人が多い」
「もう３月の10台は終わっているので、今は説明するだけだ」
ヨンジュは、自分のことを全く気にしていないようだった。先ノ岬に誰かが近づくのを防ごうとしている。
「病院に帰らないと退院させてもらえない」
「タクシーを待たせてある」
「タクシーまで一緒に行く」
ヨンジュがお客さんに質問された一瞬に、先ノ岬は、ショールームを出た。少し早足で歩いた。ヨンジュが追ってくるのがわかった。いきなり左から男が寄って来た。先ノ岬は、用意していた。ソウルの縄文電子鍋の工場で、鉄の棒のような板を見つけて、背広の左の袖に入れていた。ガチっという鈍い音がした。男はサングラスをしていた。先ノ岬は、男の顔をしっかり見た。

見覚えのある顔だった。日本人だ。
背広の袖は破れてしまった。
男は、そのまま立ち去った。２度も同じ所で先ノ岬を襲った男だ。匂いがわかった。今日は、しっかり顔を見た。お互いに顔を見た。サングラスをしていたが、見覚えがある。男は、素早く立ち去った。雑踏である。誰も何も気がつかない。ヨンジュは、先ノ岬の破れた左の袖に触った。泣いていた。
「ヨウミンソから守るように言われていた」
「何もないのか」
「この棒のおかげだ」
「笑ってくれ、犯人にヨンジュを知られたくない」
ヨンジュは、お店に引き返した。ヨンジュは、今何があったか理解していた。理解してはいけないことだ。

次の日の早朝だった。
「背広とワイシャツ交換する」
「この棒持って飛行機には乗れない」
「空港でゴミ箱に捨てる」
「犯人を見たのか」
「誰だかわかった」
「ソウルの人か」
「日本人だ」
ミスリーは、それだけ言うと、唇を先ノ岬に投げて出て行った。１分もいなかった。ミスリーが深く係っていることを知られてはメンドーだと、ミスリーはよくわかっている。ヨウミンソも、１度も顔を見せない。

ソウルのマナティ中国

○サカモトイワオ

病院の朝ごはんを食べながら、先ノ岬は考えていた。今度の見えざる悪魔のことだ。ソウルのマナティを日本に持ち込むことに反対する見えざる悪魔に間違いはない。その見えざる悪魔が、どのくらい大きいのか、まだわかっていなかった。先ノ岬を襲った犯人はわかった。
ソウルのマナティの２月の10名が送られてきた。暗号である。先ノ岬を２度も襲ったのだ。せっぱ詰まっている。先ノ岬がいなくなれば、日本へのソウルのマナティの持ち込みはなくなると思っている。あるいは、先ノ岬が、怖がって、中止するか。
ヨウミンソは韓国の人だ。日本にソウルのマナティが入らなくなっても、ソウルで販売を続けるだろう。どうしても日本にソウルのマナティを持ち込みたいのは、先ノ岬だ。ある意味では、ソウルや上海で、ソウルのマナティが販売されることは、防ぎきれないと思ったのかもしれない。ただ、日本の販売が認可されたわけではないので、ソウルでのソウルのマナティの試乗販売を妨害する意味は残っている。
すると、ターゲットは、先ノ岬と、ソウルで販売されているソウルのマナティということになる。
なんとなく見ていた10人の２月のソウルのマナティの販売者に、サカモトイワオという日本人がいることに気がついた。
「もうソウルに20年も住んでいる67歳の町医者だ」
「奥さんも日本人だ」
「ソウルのマナティは渡したのか」
「昨日渡した」
「往診に使うと言っていた」
先ノ岬は、住所を聞いた。タクシーで行けるだろう。ソウルの中心街から少し東にあった。
「お昼を外で食べます」

「３時間以内にしてください」
先ノ岬は、ミスリーの用意したパンツとセーターを着て、少しアンマッチだが、背広の上着を着て出た。左袖には鋼鉄の棒というか板が入っていた。また襲われると、ミスリーが背広を用意しないといけない。５００メートルくらい歩いて、オシャレなカフェに入った。ピザが食べたくなっていた。後から誰も追ってはいないようだった。カフェに入っても、後から誰も来ない。カフェの外に出ても、何も感じなかった。タクシー乗り場に向かった。誰も後にはいない。
無愛想な運転手さんだった。目的地に近くなったが、後から車が追っている様子はなかった。
「サカモトは、あそこの２階をオフィスにして医者をしている」
「オレの子どもも往診してもらったことがある」
「オレの家はここから３キロのところにある」
そう言って、サカモトイワオの家を教えてくれた。マンションの１室をオフィスにして、医者をやっているようだ。
先ノ岬は、迷わずサカモトイワオのオフィスに向かった。
「先ノ岬一葉と申します」
「ソウルのマナティをプロデュースしたものです」
「どのように使うのか知りたくて勝手ながらやってきました」
「いまから往診に行くからどうぞ」
サカモトイワオは、メンドーだとも思わないような素振りで、駐車場に向かった。隣に軽自動車があった。
「今日初めてソウルのマナティで往診する」
サカモトイワオの往診は、救急車のイメージではない。ゆったりしていて時間の流れが遅い。
「今から行くのは学校を風邪で休んでいる８歳の子どものところだ」
「お昼から90歳のおばあさんのところに行く」
「今日は３人だ」
「オフィスには誰も来ないのですか？」
「オフィスは私と妻が暮らしている」
「すべて往診している」

ソウルのマナティは、ゆっくり走った。30キロしか出ない。ソウルは、坂道が多い。ソウルのマナティは、気にする様子はない。坂道を下る時も30キロしか出ない。ブレーキがかかっている。
「この車が私にピッタリだ」
サカモトイワオは、往診用に選んだソウルのマナティが、思ったとおりだと喜んでいた。
先ノ岬一葉は、８歳の子どもの家に着いた時に、サカモトイワオにお礼を言って、別れた。ジャマになる。
ソウルのマナティを、往診に使う医者がいることなど、知らなかった。
ここからどうすれば病院に帰れるのか、さっぱりわからなかった。
「どこにいるのか」
「辛島明人から聞いたけど」
「自分のいるところがよくわからない」
「襲われなかったのか」
「今日は誰も追っていない」
「サカモトイワオさんはどうしたのか」
「町医者で一緒に往診に連れて来てもらって今別れた」
「どこだ」
「わからない」
「ケータイで調べて電話してくれ」
先ノ岬は、住所を調べた。韓国語で何がなにやらわからない。コンビニがあった。コンビニで聞いてみた。タクシーを呼んでやると言った。
「タクシーを呼んでくれたので病院に帰る」
「帰らないと退院させてもらえなくなる」
「襲われたら電話くれ」
ミスリーは、病院を出ると襲われると思っているようだ。
「明日日本に行く」
「説明に来るように言われた」
「ソウルのマナティの試乗販売の説明だ」
「朝１番の飛行機で出る」
ヨウミンソから電話だった。ヨウミンソの声を久しぶりに聞いた。

○麻薬の密輸

先ノ岬は、コンビニからタクシーで帰って、すぐに、医者と交渉をした。２日間、日本に行く交渉をした。走ったりムリなことをしないという約束で２日間日本へ行くことを了解してもらった。

「動脈は怖いんです」

「もしものことがあったらすぐに出血死する」

もしものことばかり起こっているのだが、医者と看護師には知らせていない。

先ノ岬は、背広に着替えて、ショートトランクを持って、その足で、金浦空港に向かった。左袖の鋼鉄の棒のような板は、病院に残してきた。ホントは、持って行きたかった。使い方が慣れている。

先ノ岬のカンだった。ヨウミンソは、危ない。ヨウミンソは、日本に来た時には、必ず襲われているのだ。

国分寺のマンションは、冷え切っていた。しかし、侵入された形跡もなかった。パソコンを起こした。メールも数がすごいだろうと思った。カップラーメンのお湯を沸かした。

ジーパンツにダウンの上着に着替えて、車に乗った。羽田に向かった。ヨウミンソは、８時30分着で羽田にやってくる。

先ノ岬は、後を何度も振り返ったが、誰もついていない。金浦空港でも、誰もいなかったと思う。まさか、先ノ岬が、自分の車で羽田に向かっていることなど、思いも及ばないだろうと思った。ミスリーも誰も知らない。

先ノ岬は、羽田の駐車場で、眠った。

遠くから、到着ロビーを見ていた。混雑している。ヨウミンソとヨウショウが出て来た。混雑しているが、明洞のようではない。ここで襲うのは難しい。

２人は、急いでタクシー乗り場に向かった。

行き先はわかっている。羽田で襲われなかったことが確認できればよい。次は霞が関だ。先ノ岬は駐車場に急いだ。

多分、約束の時間は10時だろう。ヨウミンソとヨウショウは、近くのホテルで朝ごはんを食べているだろうと思った。歩いてやってくる。先ノ岬は、大

きな道路の反対側に駐車して、２人が歩いて来るのを待った。９時40分だった。意外に早く、２人はやってきた。歩道の奥を歩いている。襲うとしたらビルの出入り口だ。今日は混雑している。襲いにくい。先ノ岬は、襲撃者の目で見ている自分が不思議だった。ヨウミンソとヨウショウは、何事もなくビルに入って行った。先ノ岬は、車を走らせた。どれくらいの時間が必要なのか、計算できない。
「先ノ岬東京に来てくれ」
ヨウショウから電話だった。今官庁のビルに入ったばかりだ。
「どうしたのだ」
「誰かが麻薬の密輸だと大きな声を出して捕まえてくれと言った」
「警備のおまわりさんがヨウミンソを逮捕した」
「その男はどうしたんだ」
「どこにもいない」
「麻薬を持っているのか」
「そんなはずはないがわからない」
「調べられているのか」
「そうだ」
思ってもみないことになった。
先ノ岬は、駐車場を探した。ホテルに入った。コーヒーショップへ入って、そのまま反対側から出て、ヨウミンソとヨウショウのところへ急いだ。ムリをするなと言われていた。動脈が切れると危ない。しかし、先ノ岬は、走っていた。
「どうなったんだ」
「まだ出て来ないからわからない」
「どこにいるのだ」
「わたしは１階のロビーにいる」
先ノ岬は急いだ。まだこんなに走れるのかと思った。
ヨウショウは、先ノ岬が飛び込んで来たのを見て驚いた。ソウルにいると思っていたからだ。
「もしもし」
ヨウミンソに電話をした。

「電話に出てもよいか」
「いま麻薬のことで調べられている」
「日本に来れないか」
「今ヨウショウとロビーにいる」
「すぐ行く」
ヨウミンソはケータイを切った。すぐ行くとはどういうことだろうか。ヨウショウは心配そうな顔だった。
先ノ岬の予想は、完全に崩された。多分、はめられたと思った。
ヨウミンソが来た。すぐに来た。
「ヨウショウすまないけど調べに応じてくれ」
中国語で、多分、こう言った。
ヨウショウは、うなずいて、警察官に従って行った。
「ちょっと来てください」
先ノ岬も、調べられるのだろう。先ノ岬は、財布しか持っていない。
「ハダカになってください」
先ノ岬は、国分寺に、一旦帰っている。はめられていることなどあり得ない。
しばらくして、ヨウショウも帰ってきた。ヨウショウは、バックもあり着ているものも多い。
「申し訳ございません」
「場所が場所だけに検査させていただきました」
「どうもありがとうございました」
警察官の上司らしき人がやってきて、こう言った。
火を着けたオトコは、もうどこにもいないのだろう。
「外で車で待っているから」
ヨウミンソとヨウショウは、そのまま説明に行った。先ノ岬は、車を駐車してあるホテルへ向かった。先ノ岬は、自分を見られていないかどうか、考えてみた。多分、先ノ岬は、日本で見られてはいないだろう。
少し離れたところに駐車して待った。
「これから出る」
「私の車が着くまで外に出ないでくれ」

先ノ岬は、正面の車道に車を寄せた。ヨウミンソとヨウショウは、静かに歩いて、車に乗った。
「羽田でごはんでも食べよう」
「今日はまだ検討中だと言われた」
「説明の印象はどうなんだ」
「印象はよい」
「麻薬のことは心当たりはないのか」
「ある」
「ソウルの飛行場でおかしを買った」
「おみやげなのか」
「ヨウショウが食べたいと言った」
「どこにあるのだ」
「トランクと一緒に羽田でコインロッカーに入れた」
「ヨウショウの好きなおかしだ」
羽田のコインロッカーを開けて、おかしの袋を出した。先ノ岬は、レストランで何か食べておくように言って、その袋を、トイレに持って行って、砕いて、流した。どこに麻薬があるのか、わからない。こうするしかない。袋は駐車場に行って、車に積んだ。何もない袋だ。
ヨウショウとヨウミンソは、コーヒーを飲んで、先ノ岬を待っていた。
「ワルイ」
ヨウショウは、自分が好きなおかしさえもこうなってしまったことに、ショックを受けていた。
「ヨウショウがあのおかしが好きなことを知っていたのか」
「あのおかしはこの前も買った」
「その前に来た時もソウルで買ったのではないのか」
「そうだ」
もう、ずっと監視されているのだと思った。
先ノ岬とヨウミンソとヨウショウは、同じ便で金浦空港に帰った。ヨウショウは、今日はソウルにいると言った。
「明日帰ると聞いていたけど」
「早く帰ったから退院を早くしてくれないか」

「先生に相談する」
看護師は、機嫌が良かった。
「晩ごはんはどうするんだ」
「病院のごはんはない」
「わたしがお弁当を買ってくるから一緒に食べよう」
看護師は手を出した。
１００００ウオンを渡した。
多分、看護師が患者の病室で、一緒に晩ごはんを食べることなど、許されていないだろう。
先ノ岬は、飛行機の中でも考え込んでいた。ヨウミンソもヨウショウも、考えていたに違いない。今日は、たまたまラッキーだったのだ。あそこで麻薬が見つかっていたら、しばらく、確保されていただろう。最悪の場合は、新聞に、あることないこと書かれてしまう。しかも、先ノ岬は何度もナイフで襲われる。
これは一体なんなんだ。何もワルイことはしていない。社会的にワルことは、何もしていないのだ。
「ここでは一緒に食べられないから屋上に行こう」
「少し寒いけど」
「これ着て」
「自分のダウンのジャンパーを持ってきた」
「先に行ってて温かいお茶を持って行く」
先ノ岬は、一瞬、おかしいと思った。６階建ての病院の屋上である。鋼鉄の棒のような板を左袖に入れて、先ノ岬は、階段を昇った。
「ここだったら風が来ないから平気」
「ここはなんだ」
「洗濯ものを干すところ」
風避けもあってテーブルもあった。ステンレスのテーブルだ。雨が降ると濡れる。
「どうぞ」
袋から、次々に食べ物が出てきた。１００００ウオンしか渡さなかったことを後悔した。左袖に鋼鉄の棒のような板が入っていることも後悔した。

「患者さんとこうすることは許されていない」
先ノ岬は、顔が赤くなるのを感じていた。恥ずかしかった。なんでも疑ってしまう自分を恥ずかしく思った。

○退院
「わたし川口に２月の報告に行く」
「堺にも寄ってくる」
３月５日だった。ミスリーは、早朝に、金浦空港から電話してきた。先ノ岬は、今日退院だった。この病院には感謝している。入院していたから命があるのかもしれない。これからは、気の抜けない毎日になる。
「報告する内容はメールしておいたから読んでおいて」
「わかった」
どうしてミスリーに、今日退院することを言わなかったのだろう。ヨウミンソにも誰にも言っていない。多分、自分の近くに、誰も近づけたくないのだろうと思った。一緒に狙われる。
「もう着替えをしているのか」
いつもの看護師がやってきた。
「いろいろありがとう」
「この棒は記念に貰っておいていいか」
先ノ岬は驚いた。驚いた顔をした。
「心配いらない」
「先生も知らない」
「あなたは興味深いけどわたしも生きられないかもしれない」
「私の仲間だと思われない方が無難だ」
この病院では、２人にしかわからないだろう会話になった。
「お金を払ったら先生に挨拶したい」
看護師は、韓国語で先生に連絡してくれた。慌ただしく、退院の準備になった。

３時頃国分寺に着いて篠田由美子に電話をした。

「今日来れる？」
「お酒は飲める？」
篠田由美子は、喜んでいた。
「国分寺にいるの？」
「わたし堺にいて今日遅くにソウルに帰る」
「わかった」
ミスリーも、うすうすわかっていた。先ノ岬が、そっと退院するだろうと思っていた。まだ病院にいると思わせておきたい。
篠田由美子と一緒に、篠田三太郎がいた。
「鯛がおいしいからつくっておいた」
篠田三太郎は、頭を丸めていた。首に数珠を下げていた。どう見ても、修行僧だ。
「目が覚めていろいろ恥ずかしいことが多いです」
「感謝しています」
「鯛メシも用意してあるから」
「おいしい豆腐もあります」
篠田由美子は、日本酒を温かくして、先ノ岬に勧めた。
「今日ミスリーから２月の報告を聞きました」
「ソウル工場は現代源田の稼ぎかしらになりました」
「３月はソウルの縄文電子鍋が出荷されるし、更に良くなるのでしょうね」
「みんな先ノ岬さんの手柄だけど」
「顧問の報酬を上げますか？」
「このままでいいです」
「月に20万円ですよ？」
「貧乏に暮らしておかないと心棒が揺れます」
「入院費を払いに行ったらどなたか先に払ってくれていたのですが」
「先ノ岬さんは入院費払えませんよ」
「どうもありがとうございます」
「それくらいのことしかできません」
「先ノ岬さんは篠田三太郎が目の前にいても何ともないのですか？」
「ええ」

「なぜですか？」
「人はみんな善人です」
「人を狂わせるのは、見えざる悪魔だしよろいです」
「篠田家のもろもろです」
「現代源田のもろもろです」
「カタチのことなのね」
「ミスリーがわたし社長だからと思ったら終わりがやってきます」
「話してあるの？」
「オンナで25歳なのに驚いています」

翌日、先ノ岬は、大崎にいた。マスクをしてスキー帽子をかぶって、薄手のヤッケを着ていた。大崎駅の公衆電話から何度も電話をするのだが、誰も出ない。留守電にもなっていない。ビルに３回出かけて部屋のベルを鳴らしてみたが、誰も出ない。監視カメラに捉えられてはいるだろうが、このカッコウでは、先ノ岬だとは気がつかないだろう。
明日は、午後にしてみようと思った。
新宿で、鋼鉄の棒のような板を探した。建築材を切ってもらって、危なくないように丸くしてもらった。何に使うのか聞かれたが、花壇だと答えた。
これは使いなれてきた。先ノ岬は、左利きではないが、この鋼鉄が当たれば、かなりのパンチだろう。あまり目立たないこともグッドである。
先ノ岬は、依然として、もう１つの顧問の仕事の難問にてこずっていた。夜も考えていたし、電話も頻繁だった。先ノ岬が音信不通だったことも不満だった。先ノ岬が助かるのは、もう１つの顧問の仕事は、見えざる悪魔を意識しないでいいことだ。社長がいて、必死に防いでいる。先ノ岬に、グッドアイデアを出して欲しい。商品ではない。商売上の交渉である。グッドアイデアはなかなか出ないが、先ノ岬が襲われるようなことには、ゼッタイにならない。襲われるとしたら社長だろう。
現代源田の顧問では、先ノ岬が襲われる。同じ顧問報酬が20万である。
頭は忙しいが、大崎に行かないといけない。先ノ岬は、左袖に鋼鉄の棒のような板を仕込んで、黒っぽいやっけにマスクをして、大崎に向かった。そのまま、南雲一郎のオフィスのベルを鳴らした。驚いたことに、人が出て来

た。
「なんだ」
30代の、いかにも強そうな男だった。南雲一郎ではない。
「南雲さんはいらっしゃいませんか」
「アポイントは？」
「ありません」
「ダメだよ」
「用事はなんだ」
「この本にサインをもらおうと思って」
南雲一郎の本を買っておいてよかったと思った。
「今日はいない」
「また来ます」
「どうしてここを知ったんだ」
「この本にここが書いてあります」
「そうか」
多分、この男が、ヨウミンソを襲っているのではないか思った。１度も顔を見たことがない。
次の日、大崎駅の公衆電話から電話をした。留守電にもなっていない。午後にまた電話をしようと思った。コーヒーショップの外でパソコンを開いていた。中では、なかなかパソコンは使いずらい。外は、まだ寒い。３月に入ったばかりだ。先ノ岬は、タバコを止めた。フツウは、タバコを吸う人が外のテーブルにいる。
南雲一郎が正面から歩いてきた。先ノ岬には気がついていない。そのままコーヒーショップに入って行った。先ノ岬は、南雲一郎に追われているのだ。２度もソウルでナイフで襲われた。一度はもう少しで心臓に達するところだった。入院していた。退院したばかりだ。お互いに、20センチの距離で顔を見た。
あらためて考えてみた。南雲一郎は、なぜ先ノ岬一葉を殺さないといけないのか。彼はすぐそこにいる。聞いた方が速い距離にいる。ヨウミンソからメールがきた。英文の雑誌の記事だった。自動車の未来の話しだ。南雲一郎である。この世界では南雲一郎は有名である。自動車のヒット商品メーカー

でもある。今日付けの発行日の雑誌である。ヨウミンソには、先ノ岬を襲っている男が、南雲一郎であることは話していない。なぜ、これを送ってきたのだろうか。
先ノ岬一葉は、真剣に読みはじめた。
「少し前に、１輪車の自動車もありと思って記事を書いたら、やろうと思うけどという話しがあった」
このことは、先ノ岬のことを言っているようだ。
「自動車は夢を追うものであって馬車に戻ってはいけない」
「ソウルで販売をはじめるようだが自動車の将来の夢を壊すものだ」
「自動車はカッコ良くなければならない」
これは、ソウルのマナティを批判している。これは、英文の雑誌である。先ノ岬にはよくわからないが、世界的な自動車の雑誌なのだろう。
南雲一郎は、誰も開発しないだろうと言った。しかし、先ノ岬とヨウミンソは、開発をはじめた。実際に、ソウルで月に10台だが、販売をはじめている。先ノ岬は、真剣に、この英文の雑誌を読んだ。多分、来月号は、ソウルのマナティの写真が載るだろう。時速が30キロしか出ない自動車である。電気自動車がたくさんつくられてきているが、高速道路を走れない電気自動車などない。時速30キロでは、遅くて高速道路を走れない。
先ノ岬一葉には、自動車は、サカモトイワオのような、67歳の往診しかしない医者のものだと思う。ものすごい考えの違いがある。世界は市場経済社会である。先ノ岬とヨウミンソのような考えもありだし、南雲一郎のような考えもありだろう。それが、なぜ、先ノ岬一葉とヨウミンソを襲うことになるのか。
これは、戦いであることは確認したが、市場の戦いは、市場経済社会だから何にでもある。しかし、先ノ岬とヨウミンソが襲われることは、何かがおかしい。自動車のマーケティング上の見えざる悪魔だけではない。
少しは見えてきた南雲一郎の周辺だった。南雲一郎は、修行僧などやりそうもないと思った

〇ゆりかご

先ノ岬は、３月だけは、10台の他に、チャイルドシート付きを５台発売したいというヨウミンソの提案を受け入れていた。ヨウミンソは、依然として姿を現さなかった。工場でソウルのマナティをつくっている。ヨウミンソの工場は、２輪車もだが、ソウルのマナティも、流れ作業で車をつくっているわけではない。１台を手作りで生産している。社員の熟練がなければできない。みんなが、ソウルのマナティが好きでなければできない。ヨウミンソのやり方は、社員が人件費ではないやり方なのだ。一般的に、会社では、社員は、コピー機のリース料と同じである。もっと安いコピー機械が発売されれば、リース解約して新しいコピー機にする。人も同じなのだ。少なくとも、会計上は同じである。ヨウミンソは、全く違う考えをする。人がいなければ、仕事をしないのだ。ソウルのマナティだって、キムハヌルがいなければ、先ノ岬の説得には応じなかっただろう。
３月15日になって、いきなり慌ただしくなった。
「今日ソウルの縄文電子鍋の出荷を始めた」
「３月の出荷は２００００個で止める」
「何も問題はない」
ミスリーからのメールだった。
「ソウルのマナティの３月の10台とゆりかご５台の名簿を送る」
続けてメールがきた。
「まだ生きているのか」
ヨウミンソは、工場に籠っているし、先ノ岬は宅急便の配達にも注意を払っている。
「なんとか生きている」
「明日上海に行ってくる」
「上海でも月10台の販売のフォローをしないといけない」
「ヨウミンソから３人借りて上海に一緒に行ってもらう」
「ハンソムルがリーダーだ」
「ヨウショウはどうしているのか」
「体制ができていないので怒っている」
「ヨウショウは北京と接触しているので状況を肌で感じている」
「気をつけてくれ」

「わたしを傷つけてもソウルのマナティは止まらない」
「先ノ岬は傷つけたくらいでは止まらなかった」
「わたしにはどうしてソウルのマナティを止めたいのか、それがわからない」
「ソウルの縄文とソウルの縄文電子鍋はどうして止める人がいなくなったのか」
篠田三太郎のことはミスリーに話していない。篠田三太郎という権力者が生んだ見えざる悪魔だった。篠田三太郎が修行僧になれば、ソウルの縄文とソウルの縄文電子鍋を止める人はいない。
「わたしにはわからない見えざる悪魔なのね」
「ソウルの縄文の見えざる悪魔はいなくなったのか」
「そうだ」
「ソウルのマナティの見えざる悪魔は命狙うから怖い」
「そうだ」
「油断しないようにする」
「そうしてくれ」
確かにそうだ。ミスリーに何かあっても、ソウルのマナティは止まらない。しかし、ミスリーに何かあると、先ノ岬が止まる。ここを知られたくはない。南雲一郎に知られたくない。ミスリーも、国分寺のマンションには来ない。先ノ岬も、ミスリーのマンションに、行くことがなくなった。お互いに注意している。
「ソウル市内のゆりかごの試乗者の映像を掲載したからネットで見てくれ」
「まだ生きているのか」
「すぐ見て電話する」
３分の映像だった。先ノ岬とヨウミンソに知らせようとした映像である。もちろん、一般にも公開されるので、名前や顔などは編集されている。後の座席はチャイルドシートになっている。交換などしない。専用である。２人乗りなのでダンナが乗れない。買物に行くのに、ダンナは自転車で後からついていっている。何も不自由はなさそうだ。フツウは、あかちゃんとお母さん２人だ。今日で２日目だが、ガソリン車は、ダンナの自動車になって、あかちゃんとお母さんは、乗ることがないだろうと言っていた。

「明洞のショールームにゆりかごも置いている」
「１日10人くらいのあかちゃんが見に来る」
「ソウルのマナティのホームページを見てやってくる」
韓国はネット社会である。
先ノ岬は、ソウルのマナティは止めようがないのではないかと感じている。
生活者の感覚に従っている。確かに、何分で１台生産できるから、いくら儲かるという論理では、成立させにくい。しかし、生活することと移動手段を考える時、ソウルのマナティに共感する人も少なくないことは、もう確かなものになってきた。
ソウルのマナティは、人が動く押しボタンにピッタリである。人が動く押しボタンは、愛だ。
ヨウミンソが、フツウの社長になって欲しくないと願うだけだ。今は、ヨウミンソは、人を愛している。自動車を愛している。
南雲一郎は、何かが崩れている。大きな権威が南雲一郎にあることは確かだろう。ヨウミンソや先ノ岬一葉を足蹴にしてもおかしくないほどの権威だろう。
多分、愛は、みじんもない。
先ノ岬は、事業は、人が動く押しボタン次第だと思っている。どれだけ、その事業で恩恵を受けるだろう生活者を愛するかにかかっている。そして、その事業を愛しているかだ。
「先ノ岬は見てくれたのか」
考え事をしていると、ヨンジュから電話があった。
「素晴らしい」
「なにが素晴らしいのか」
「ヨンジュが素晴らしい」
「なぜだ」
「生活している人をよく見ている」
「まだ知りたいか」
「どんどん見たい」
「ちょっと聞きたい」
「なんだ」

「フツウの自動車とソウルのマナティだが、子どもがいるとどこが違うのか」
「どうしてソウルのマナティがゆりかごになるのか？」
「そうだ」
「バンって発進しない」
「止まる時もガッと止まらない」
「あかちゃんが寝る」
先ノ岬は、なるほどと思った。ヨウミンソはよくわかっている。時速が30キロしか出ないのだ。少しブレーキを甘くしても止まる。やさしく走るのだ。
「ヨウミンソから電話だ」
ヨンジュは残念そうに先ノ岬との電話を切った。
「北京に行ってくる」
「先ノ岬は北京に来るな」
「今は先ノ岬の方が危ない」
「この雑誌の記事を読んでおいてくれ」
「先月の続きだがまだ雑誌は発売されていない」
「どうしたのだ」
「本人がメールしてきた」
「南雲一郎か」
先ノ岬は、急いで英文の記事を読まないといけないと思った。先ノ岬も北京に行くかどうか、決めないといけない。
ソウルのマナティの写真が載っていた。ブレーキが甘い。坂道だと28キロしか出ない。遅過ぎてかえって道路では危ない。ライトが強力でない。などなど11項目の欠陥があると記されてあった。ソウルで販売されているが、評判は良くないと書かれてあった。中国でも販売するかもしれないが、日本では、このようなものを自動車として認めてはいけないと書いてある。
先ノ岬は、着替えようとしていた背広を脱いだ。南雲一郎は、中国を諦めている。

○３日続けて南雲一郎と出会う

「今ソウルに帰ってきた」
「北京から中山公園のオフィスを調べに来た」
「１年間は月に10台しか販売しないことを条件に中国での販売を認めるようだ」
「何かあっても大きな出来事にはならないようにしておきたのだろう」
「４月になったが３月のソウル工場はどうだ」
「今帰ったばかりだ連絡する」
先ノ岬は大崎から電話をしていた。コーヒーショップの屋外のイスからだ。
正面から南雲一郎が歩いてきた。先ノ岬は、マスクも何もしていない。多分、コーヒーを飲みに来たのだろう。
南雲一郎は、先ノ岬には目もくれずに、コーヒーショップへ入って行った。
左の袖口を調べた。忘れずに、鋼鉄の棒のような板をセットしてきている。
「しばらくです」
南雲一郎が出てきて、先ノ岬に話しかけて来た。落ち着いた様子だった。
「ヨウミンソに送った雑誌の記事を読んでいました」
「おもちゃのようなものを自動車と言っては困る」
「自動車だと言ったことはありません」
「ソウルのマナティです」
「日本への販売申請を取り消してください」
「私やヨウミンソは、ソウルのマナティで往診する医者が大事だ」
お互いにことばが慎重だった。録音されているかもしれない。
「自動車産業としてはどうということもないソウルのマナティをどうして反対するのですか？」
「リスクのある反対の仕方をしていますが」
南雲一郎は、黙って、コーヒーを持って歩きはじめた。
先ノ岬は、こうやって会っていた方が、先ノ岬には、好ましい方向だと信じている。人は、思っているだけでは、ワルイことしか考えない。
考えてみたらおかしなことだ。たかだか月に10台しか売らないソウルのマナティを、命を賭けて攻防しているのだ。南雲一郎には、それが、命を賭ける価値があるのだろう。無視すればいいと思うのだが。
それがよろいというものだろう。

４月２日も、南雲一郎は、同じ時間に、コーヒーショップにやってきた。
「自動車がここまでになるのにみんな苦労した」
「日本の産業になって日本経済を引っ張るようになってやっと認めてもらった」
「あなたのような部外者に入り込まれたくはない」
それだけ言うと、またテイクアウトのコーヒーを持って、歩いて行った。
今日は、昨日ほど、危険だとは思わなかった。しかし、鋼鉄の棒のような板は、左袖に入っている。
確かに、先ノ岬やヨウミンソは、自動車産業界や南雲一郎から見れば、部外者だろう。しかし、おもしろいことに、生活者は、そういうことはおかまいなしである。ソウルの往診しかしない医者は、ソウルのマナティがピッタリだし、ソウルのお母さんは、ソウルのマナティがゆりかごである。
そういうところが、自動車産業界の見えざる悪魔だし、南雲一郎の見えざる悪魔だと思う。
４月３日も、南雲一郎は、同じ時間にやってきた。
「ここで私を見張っているのですか？」
「公衆電話から電話するのは先ノ岬さんですか？」
「篠田由美子さんは苦心すると思います」
それだけ言うと、南雲一郎は、テイクアウトのコーヒーを持って立ち去った。
お互いに、ソウルで、20センチの距離で、激しく見合った顔である。南雲一郎が、どうしても先ノ岬を殺してしまおうと思って、まだ１カ月も経っていない。
いままで、南雲一郎の前に立ちはだかった人はいないのだろうか。もしかすると、誰もいなかったのかもしれない。南雲一郎が右だと言うと、みんな右だったのだろう。先ノ岬とヨウミンソは、いきなり、飛び出してきたのだ。南雲一郎に断りもなく。
南雲一郎のここ10年くらいでは、あり得ないことだろうか。
それにしても、先ノ岬を刺そうとした南雲一郎の執念は、なんだろうか。先ノ岬は挑戦者である。何度も狙われている。しかし、南雲一郎は、特異だと思わざるを得ない。

４月５日にミスリーがやってくる。３月のソウル工場の実績を報告するためである。
「ヨウミンソは毎日のように上海に行っているがどうなっているのだ」
「なんのことだ」
「ヨウミンソを襲うオトコだ」
「ソウルと上海は諦めたのではないか」
「ソウルのマナティをソウルと上海で販売することか」
「韓国と中国だ」
「もうすぐ北京から許可が下りるからか」
「そうだ」
「ヨウミンソを襲ってもムダなのか」
「そのように見える」
「ヨウミンソは日本では必ず襲われるけど」
「日本だけは守りたい」
「ソウルのマナティは攻めてるわけではない」
「誰だかわらないがソウルのマナティに攻められていてイヤだと思っている」
「月に10台しか売らないのに」
「先ノ岬を襲っている男はどうしてるのか」
「わからない」
「明日行くけど会わない方がいいのか」
「ミスリーを知られたくない」
「じゃ～４月にソウルに来て温泉に行く約束してくれ」
「わかった」
「明日は朝早く出て川口に行って堺に行って夜帰る」
「明日報告する内容をメールする」
３月のソウルの縄文は、ソウル３００００個上海１００００個日本２００００個合計６００００個で、ソウルの縄文鍋は２００００個で、ソウルのマナティは15台だった。

〇ソウルのマナティ中国

４月に入って、ミスリーは、中山公園にいることが多くなった。ヨウミンソもである。

先ノ岬は、大崎のコーヒーショップで、メールを見ていた。

受注活動などをやってはいけない。まだ認可されたわけではない。南雲一郎が、いつもの時間にやってきた。先ノ岬は、しばらく大崎には来ていない。南雲一郎が上海に行っていないか気になった。この時間にここいることが、情報を得られる。南雲一郎も同じだろう。先ノ岬が東京にいることを確認できる。

先ノ岬は、左袖を確認する。鋼鉄の棒のような板が入っている。南雲一郎のナイフは切れ味が鋭い。南雲一郎は、黙ってお店に入って、テイクアウトのコーヒーを持って出てきた。

「11ヶ所の欠陥についての返事が来ませんが」

「ソウルのマナティなんか無視されていると思っていますので」

「たかだか月に10台です」

南雲一郎は、黙って立ち去った。

わかってほしいのだ。たかだか月に10台のソウルのマナティに本気にならないで欲しい。どうあっても先ノ岬を消そうとするのだろうか。それはなんなのか。本気にならないとヤバイと思っているのだろう。それはわからないでもない。

「いま北京にいる」

「これから上海に行って販売をはじめる」

「誰も追ってはいないか」

「誰にも追われていない」

「それでも気をつけて」

「先ノ岬は大丈夫なのか」

「今日は大丈夫だ」

「どういう意味だ」

「心配いらない」

先ノ岬は、自分と南雲一郎が対峙していれば、ヨウミンソには何も及ばない

だろうと思っている。
ソウルのマナティの中国では、一応の決着がついた。日本ではどうなるだろう。このまま終わるとは思えない。
今話していたのに、ヨウミンソからメールがきた。南雲一郎の記事が出ている雑誌が発売されたらしい。これから毎月、南雲一郎は、ソウルのマナティを批判し続けるのだろうか。
「ゆりかごのモニターの映像をネットで見てくれ」
「プサンのお医者さんのモニターも映像にしたから見てくれ」
ヨンジュからメールだった。
「私が見たからといって映像は消さないでください」
「今日から上海もはじまるけど時には上海もお願いします」
「わかった」
プサンにも、往診を専門にしている医者がいて、ソウルのマナティを使っていただいていることを知らなかった。ゆりかごは、あかちゃんにピッタリなのだろう。
先ノ岬は、パソコンの時計を見た。40分後に虹橋空港に出発する羽田発に乗れると思った。今日は、いつものショートトランクを持っていないが、パスポートは持ってきた。
ギリギリだった。
先ノ岬は、今買ったチケットを払い戻すために、カウンターへ急いだ。先ノ岬は、南雲一郎に読まれていた。さっきテイクアウトしたコーヒーをそのまま持っていた。あのコーヒーがなかったら気がつかなかった。サングラスにマスクである。南雲一郎は、そのままゲートに向かった。
これはタイヘンナことだ。もう、南雲一郎は、どんなことがあっても、先ノ岬を襲うつもりだ。しかも、自分が犯人であることを知られないように襲うつもりだ。大崎ではまずい。もちろん羽田でもまずい。
「騙されるとこだった」
後から南雲一郎の声がした。
「上海で私を襲うのか」
「日本への認可申請を取り消せ」
「たかだか月に10台だ」

「そういう問題ではない」
先ノ岬は、電車の乗り場に向かった。南雲一郎はタクシーだろう。しかし、１つ安心感がある。ヨウミンソは襲われないだろう。
先ノ岬は、電車の中で考えていた。これは、南雲一郎の一存でやっていることなのだろうか。バックに自動車の会社がいるのだろうか。もしバックがいたとしても、先ノ岬やヨウミンソには、見えないだろうと思った。
ミスリーから電話がきた。
「今品川って言ってたけど」
「用事があって品川から帰るところだ」
「ソウルのマナティの中国の試乗販売を開始したからホームページを見てくれ」
「ここの中山公園のショールームに１台おいてある」
ミスリーは中山公園にいるのだ。
「聞いているのか」
「多分、今日中に４月の10台は決まると思う」
「わかった」
「なにかあったのか」
「これから国分寺に帰る」
「ソウルのマナティの10台はどこにあるのだ」
「いまソウルを出たから明後日だ」
「船なのか」
「そうだ」
南雲一郎は、今日中に中国の10台が決まるという話しを、聞きたくはないだろうと思った。
ヨウミンソは、上海に送る10台を、用意していたのだ。

ソウルのマナティ日本

〇篠田由美子の決断

「今晩ごはん食べに来ませんか？」

篠田由美子からの誘いだった。

先ノ岬は、もう１つの顧問の仕事の難問に頭を痛めていた。朝からずっと考えていた。

篠田三太郎はいなかった。篠田由美子だけである。

「今日はおすしを握ったんだけど」

「わたしのおすしはおいしいから」

「おつくりもあるから」

「日本酒でいい？」

「握りも少しあった方がいいわね」

「どうぞ」

篠田由美子は、先ノ岬一葉に話しがあるのだ。

「ソウルのマナティが日本での販売が認可されるかもしれない」

「現代源田は、この仕事を降りようと思うの」

篠田由美子がこう言い出すかもしれないと、先ノ岬は読んでいた。

「南雲一郎さんが来たのですか？」

「あの方にはお世話になっています」

「現代源田が自動車の仕事ができないようにしてやると脅されたんでしょ？」

「南雲先生の考えとは、あまりにも違うことを、現代源田はやっているから」

「未来自動車の会長からも電話がかかってきました」

「南雲先生のメンツを潰さないようにしてくれだけど」

「現代源田なんか吹けば飛ぶような会社だから」

篠田由美子の握ったすしは、思ったよりもおいしかった。

「私をソウルで刺した男は南雲一郎です」

篠田由美子は、箸を片方を落とした。
「その後すぐに、もう１度私を襲いました」
「もし私が死んでいたら、彼は殺人犯なんです」
「もちろん犯人は上がらないだろうけど」
「そうまでして自分のメンツを守りたい男を守るのですか？」
「未来自動車で同じような企画が上がった時、南雲先生が猛反対して収まったって言っていました」
「もしあのままやったら大赤字だっただろうって」
「先ノ岬さんやヨウミンソのやっていることは、自動車の仕事をしているみんなの代表の南雲先生に反旗をひるがえしているのです」
「自動車は生活者のものです」
「自動車をつくっている人のモノではありません」
「ヨウミンソはどうして襲われないのですか？」
「ヨウミンソは４回も襲われました」
「私は、私やヨウミンソを襲っている人が誰だかわかりませんでした」
「もしかして現代源田かもしれないと思ったりもしました」
「しかし、今は、はっきりわかっているし、南雲一郎とは、何度も会っています」
「会っているっていうのは、どういうことですか？」
「大崎の彼のオフィスの近くのコーヒーショップでいつも同じ時間に来ます」
「私を消さないとソウルのマナティが日本に入ってくると思っています」
「もし現代源田がソウルのマナティを諦めたとしても、現代源田には先がありません」
「あなたは、ソウルのマナティを諦めて、いままでの、自動車部品を納めさせてもらう仕事を続けるか、自動車部品を諦めて、ソウルのマナティを選ぶか、決断をしなくてはならないんです」
「自動車部品を選んでも、先行き、仕事はなくなります」
「ノリ巻きもあるから」
篠田由美子は、ノリ巻きも出してきた。
「おいしいでしょ？」

「ええ」
「ちょっと聞きたいんだけど」
「なんでしょうか」
「あなたは20万円の報酬で雇われている現代源田の顧問なんだけど」
「どうして自分の命を賭けてまで現代源田のために戦おうとするの？」
「ソウルのマナティのために命まで賭けるの？」
「現代源田はソウルのマナティを諦めるからってあなたに話しているんだけど」
「よく承知しています」
「わたしにはよくわからない」
「あなたは、ソウルの縄文も同じことをした」
「篠田三太郎に殺されかけたのに」
「あなたは自分の命を賭けてソウルの縄文を守った」
「現代源田は息を吹き返すかもしれない」
「わたしが知りたいのは、どうしてこれくらいのことに命を賭けてしまうのかが知りたい」
「私は、どうしたら現代源田が生き残れるか、活気のある会社になるか、よくわかっています」
「多分、私にしかできない」
「私は、見えざる悪魔と戦って生きている」
「見えざる悪魔は、どんな個人にもあるし集団にもあります」
「悪魔だからとんでもないことをします」
「篠田三太郎さんのように、修業すれば、後悔になるんだけど」
「それが見えざる悪魔です」
「出来事が大きい小さいではなくて、見えざる悪魔はいつも大きいんです」
「たかだかソウルの縄文やソウルのマナティを潰すために命がかかってしまうんです」
「日本を潰すような大きな出来事だって同じ事です」
「昔から、人間というのは、そういうことになっています」
「私は、ただ、そういうことを、知ってしまった人間に過ぎません」
「篠田三太郎さんや南雲一郎さんに恨みはありません」

「今は、南雲一郎に巣食っている見えざる悪魔と、私は、戦っています」
「命を賭けてです」

〇今日で終わりだ

「今日日本から工場を見学に来た」
「南雲一郎も一緒だったのか」
「そうではなくて霞が関の人だ」
「どういう印象なんだ」
「多分認める」
「日本へ行かないといけない」
「日本へ来るように言われたのか」
「そうではなくて販売の準備をしないといけない」
「堺へ来るのか」
「そうだ」
「また３人くらい連れてくるのか」
「そうだ」
先ノ岬は、南雲一郎が勝負に出ると思った。もう、ここで、先ノ岬を消したとしても、あまり大きな意味はない。先ノ岬がいなくなっても、ヨウミンソは堺に来る。ヨウミンソがいなくなっても、ソウルの誰かを先ノ岬は呼ぶだろう。
南雲一郎には、メンツしか残っていないだろうと思った。危険である。一見、先ノ岬とヨウミンソが、南雲一郎に勝ったかのようである。
「明日堺に行く」
「日本での販売の準備のためか」
「ホームページも準備したい」
「わかった」
「ヨウミンソも行くから来てくれ」
「約束ができない」
「用事があるのか」
ミスリーは、曖昧な返事をする先ノ岬が不思議だった。

大崎のコーヒーショップの屋外のテーブルで、ヨンジュが動画サイトに掲載している、上海のソウルのマナティのモニターの映像を見ていた。おばあさんが病院通いをするのに使っているソウルのマナティだ。ゆっくりしか歩けない。何事も、ソウルのマナティのように動く。映像を見ていると、やはり、ヨウミンソは、ただものではないと思ってしまう。時間の流れが遅い。発進の仕方も、ブレーキのかかり具合も、みんなゆっくりなのだ。
「中国は今月10台なんだけどゆりかごもやったのか」
「ゆりかごは３台でフツウのが７台だ」
「試乗の映像を見ている」
「ヨンジュがグッドだ」
「その後襲われていないのか」
「なんとかなっている」
ヨンジュは、今度は、日本に来ないといけないだろう。
いつもの時間より少し遅れて南雲一郎は現れた。さっさと店に入って行った。注意しないといけない。南雲一郎は敗者になっているかもしれない。よろいの大きい人は、自分を許せなくなる。
「昨日霞が関から呼ばれた」
南雲一郎は、意外なことに、丸テーブルの横に座った。
「自動車産業のために反対だと言って来た」
「数が少ないので認めたい意向のようだ」
「篠田由美子さんが今日の朝訪ねて来た」
「自動車会社向けの電子部品の売上が少なくなってもいいからソウルのマナティを続けると言って帰った」
「何を考えているのか」
「生活者を考えている」
「あんなものつくっても産業にならない」
「そういう考えは昔の考えだ」
「命が惜しくはないのか」
「そういうことは口にしない方がいい」
ゆっくりと、南雲一郎は歩いて行った。

篠田由美子に感謝しないといけないと思った。篠田由美子は、南雲一郎の脅迫に屈しなかった。南雲一郎を蹴っても、現代源田の自動車向けの電子部品がゼロになるわけではない。篠田由美子は、先ノ岬に片足を踏み込んだ。それはかまわないが、用心をしないといけない。先ノ岬がいなくなれば、困る人が、１人増えた。
先ノ岬は、パソコンをしまって。歩きはじめた。トイレに行けばよかった。外でコーヒーを２杯も飲んだ。大崎駅のトイレに入った。誰か後から入ってきた。いきなりその男がトイレのドアまで飛ばされた。
「大丈夫か」
ヨウミンソだった。堺にいるはずである。トイレのドアに飛ばされた男は南雲一郎だった。ナイフが落ちていた。大きな音がした。誰かやってきた。南雲一郎は、ナイフを拾って、立ち上がって、走り去った。
「今日はゼッタイ襲われると思っていた」
「どうしてここにいることがわかったのだ」
「国分寺のマンションからつけていた」
「犯人が南雲一郎だとは知らなかった」
「反対の足で蹴ったら便器に頭をぶつけていたかもしれない」
ヨウミンソの方がプロだ。南雲一郎は３度も先ノ岬をナイフで襲って、２度も失敗している。１度は重傷だが。
「南雲一郎のオフィスに行く」
お互いに勝負に出たのだ。ヨウミンソは、強いのだろう。犯人がわかればほっておけない。南雲一郎は、今後、ヨウミンソに狙われると思った。ヨウミンソはコンビニでマジックペンを買った。
何度押しても、誰も出て来なかった。灯りが漏れているのだが。
「今日で終わりだ」
ヨウミンソは、英語で、大きくドアに書いた。

○篠田由美子と篠田三太郎
「晩ごはんをいただきたいと思いまして」
「６時に来てください」

「承知しました」
今日は、先ノ岬が、篠田由美子に話しがあった。
大崎駅のトイレ事件があって以来、南雲一郎は、姿を見せなくなった。日本でのソウルのマナティの販売認可も下りた。日本での販売は、５月の10名からになった。すでに販売を開始している。
昨日の夜は、国分寺のマンションで、ヨウミンソのごはんを食べた。ヨウミンソは、国分寺のマンションは、はじめてだった。ヨウミンソの部屋に較べたら質素だ。先ノ岬は貧乏である。ヨウミンソは、道具が足りないと言って、新大久保のスーパーマーケットに行った。食材も新大久保で調達した。１人で行ったが何事もなかった。南雲一郎は、姿を見せなくなった。
「先ノ岬はどうして南雲一郎のことを話さなかったのだ」
「ヨウミンソが南雲一郎を襲っても壊れる」
「時にはチカラを使わなければならない時もある」
先ノ岬とヨウミンソは、似ているが違っている。何物にも屈しないが、命も賭けるが、戦い方が異なる。ヨウミンソは南雲一郎を知ったら、南雲一郎を襲ってしまう。チカラを使う。そのことは、先ノ岬も、よくわかっていた。見えざる悪魔は、ゼッタイなのだ。どんなにチカラがあっても、見えざる悪魔には敵わない。先ノ岬は、そう信じている。ヨウミンソの「時にはチカラが必要だ」は、見えざる悪魔の優等生に対しては、確かに、有効な時がある。南雲一郎は、南雲一郎の見えざる悪魔の優等生でもある。
先ノ岬は、ヨウミンソのように、強くない。ヨウミンソのように戦うことはできない。南雲一郎を、ひと蹴りで、トイレのドアまで飛ばすことなどできない。そんなヨウミンソのチカラは、見えざる悪魔の優等生の南雲一郎には、有効だったのかもしれない。
「誰がやってるのかわからなかったから怖かったのだ」
また少し、ヨウミンソが理解できた。

篠田三太郎がドアを開けてくれた。
「調理していますから、どうぞ」
篠田三太郎からよろいの目が消えていた。
「今日は鳥料理だから」

「鳥とタケノコごはんがおいしい」
「ありがとうございます」
「お酒は何にする？」
「お勧めがありますか？」
「新潟のお酒だけど」
「温めるから」
「今日は篠田三太郎が一緒にいますから」
「ええ」
篠田由美子は、小さな湯のみにお酒を注いできた。
「篠田三太郎はお酒はやりませんので」
鳥とほうれん草とゴマの和え物がおいしい。
「南雲一郎と話しました」
「現代源田は自動車会社への電子部品の仕事がなくなったとしてもソウルのマナティを続けるとあなたが言ったのだそうです」
「驚いていました」
「お礼が言いたいんだろうけど」
「あなたのためでもないから」
「篠田三太郎と相談しました」
「今のまま真綿で首を締められていつか終わるのを待つかどうかです」
「ひょっとすると宝くじのようなものがあって、真綿が溶けるかもしれないけど」
「待ってもいけないし」
篠田由美子は、焼いた鳥もおいしいからと出してきた。
「わたしはすごく不思議だけど」
「あなた自分で会社やればすごい経営者になれるでしょ？」
「ソウルの縄文もソウルのマナティも、あなたのチカラなのに、あなたのものにはならない」
「わたしには理解ができない」
「何が望みなの？」
「私があなたに要求するものは何もありません」
「ひょっとすると、現代源田は立派な会社に蘇るかもしれないけど」

「そう願っています」

「願ってる？」

「先ノ岬は、現代源田の株主でもないし、社員だけど顧問で月に20万円しか報酬がない」

「それなのにどうして？」

「何度も命を狙われて」

「とても理解ができない」

「私の生き方の話しですから難しい」

「難しいって？」

「フツウの概念では理解できないと思います」

「自分を現代源田の取締役にしてくれって、フツウは言うでしょ？」

「わたしが応じるかもしれない」

「私はあなたに何も要求はしません」

「何かが欲しいために現代源田の顧問をやっているわけではありません」

「なんなの？」

「私の生きるコンセプトに従いたいだけです」

「なんなの？」

「クリエイティブと挑戦です」

「ソウルの縄文やソウルのマナティを通じて現代源田が蘇れば好ましい」

「それがあなたの挑戦なの？」

「クリエイティブで挑戦的なテーマをいただけて感謝しています」

「とても理解ができない」

「私は、私のことより、私の周辺が良くなることが、うれしい」

「そんな姿勢ではながく生きられないかもしれない」

「承知しています」

篠田由美子は、とり肉とタケノコのごはんがおいしいからと出してきた。

「お酒にも合うから」

篠田三太郎は、何も話さないでずっと、篠田由美子と先ノ岬一葉の話しを聞いていた。篠田三太郎の眼には、よろいがない。世に出たいという欲望も消えていると思える。ありのままいたいのだろう。篠田由美子も、篠田三太郎に、話しを向けない。

「あなた南雲先生に命を狙われているんでしょ？」
「あの人は、一生かけてあなたを狙うかもしれない」
「あり得ないと思います」
「どうして？」
「いままでそういう経験がありません」
「ものすごいワルな人とも会っていますが、いつか、人に戻ります」
「人は、愛に溢れていることがフツウの状態です」
「今の南雲一郎のように、悪魔の優等生になってしまうことが、人には、一時的には、あるものです」
「ワルになるのは、ほぼ、よろいによるものです」
「南雲先生の権威を守りたいのね」
「私から見れば、権威などというのはよろいだし、つまらないし、価値のないものです」
「だけど南雲先生の存在を示しています」
「くだらない」
「あなたは、フツウではない」
「南雲一郎の今がフツウではない」

〇決着

ヨウミンソは、堺にいることも多くなった。ヨウショウも堺に何度も来る。上海と関空は近い。ソウルと関空も近い。
先ノ岬は、日曜の早朝、約束どおり、金浦空港に向かった。羽田で、一瞬、南雲一郎を見た。先ノ岬は、最後の搭乗者になったが、南雲一郎は現れなかった。不思議なことに、マスクもなければ何もない。南雲一郎だと、すぐにわかった。
金浦空港から、タクシーに乗って、ミスリーから連絡のあったコーヒーショップに向かった。金浦空港でも、南雲一郎は、降りて来なかった。先ノ岬は、これからミスリーに会う。どんなことがあっても、南雲一郎に見られては困る。ミスリーを攻められるのが、最も困ることだ。
タクシーの後には、誰もいなかった。

コーヒーショップで、ミスリーの車に乗り換えた。
「危険なことしてるんだろうね」
ミスリーは、何度も何度もバックミラーを見ていた。温泉宿に向かっていた。楽しいはずなのに、沈みそうな雰囲気が漂ってしまう。ミスリーは音楽をかけるのだが、すぐにバックミラーを見てしまう。
あまり話しもしないまま温泉宿に来てしまった。日曜の朝である。この前のように、昨日からの家族連れもいる。
「わたしトイレに急ぐ」
ミスリーは、宿の駐車場に行く前に、宿のトイレに急いだ。
「待ってて」
宿の玄関から南雲一郎が出てきた。ミスリーとすれ違う。ミスリーは南雲一郎を知らない。先ノ岬は、固まってしまった。ミスリーが殺られると思った。
南雲一郎は、真っ直ぐ先ノ岬の方にやってきた。今日は、左袖に鋼鉄の棒のような板が入っていない。金浦空港からそのままだ。
「窓を開けてください」
「これを読んでください」
「あのタクシーで羽田に帰ります」
「ミスリーには私を知らせないでください」
「ジャマはしません」
南雲一郎は、待たせてあったタクシーに乗り込んで、走り去った。ナイフは持っていなかった。雰囲気が違う。しかし、羽田で探したのに、金浦空港でも、どうして先ノ岬の目をかいくぐったのだろう。不思議だ。ここでなぜ襲わなかったのだろう。ミスリーと一緒に刺されてしまう。
「先ノ岬一葉　殿」
「いろいろ考えました。あなたは、私にとってジャマ者です。あなたを放置すれば、わたしの自動車への功績に、傷をつけることになるでしょう。私は、どの自動車会社に行っても、どの自動車の部品会社に行っても、大事に扱われます。どこの研究所に行ってもです。政府系の委員会にも参加しています。そんな私を、あなたは無視します。全くの素人なのに、私と同じステージで何かをしようとしています。ソウルのマナティなど、自動車の素人

が考えるようなことではありません。その後のことは、ここにも書きたくはありません。あなたのことを考えると、無性に怒りがこみ上げるのです。
一昨日までの南雲一郎の話しを書いています。
今から、昨日からの南雲一郎の話しを書きます。
私は、ソウルのマナティの特許を現代源田に公開することを要求します。タダとは言いませんが、１％でしょう。タダと同じですが。ソウルのマナティは、先行しているので、競合しても、やっていけるかもしれません。年寄りや子どもにやさしい車があってもかまわないと思うのです。車は、産業の発展のために欠かせませんが、生活者の生活にも欠かせなくなってきています。
先ノ岬一葉は、多分、この私の要求をのむでしょう。大局を観る人だから。
もし、篠田由美子さんが反対しても、説得してください。
返事は、ここにお願いします」
ミスリーが乗ってきた。
「どうしたの？」
「もしもし」
「手紙を拝見しました」
「早速ですが返事を差し上げます」

『ソウルのマナティ』

挑戦者としての先ノ岬一葉の物語である
『ソウルの縄文』の続編

２０１１年

２０１９年

げんじあきら

『ソウルの縄文』を読んでいただきたい

『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたい

『ヒット商品』を読んでいただきたい

『少しの解放感』を読んでいただきたい

『まゆ』『こころの色』を読んでいただきたい

『壊れるよろい』を読んでいただきたい

ソウルのマナティ

著者　　　げんじあきら